

「手紙」を運ぶオルソン

—— Charles Olson, *The Maximus Poems* 試論 —— (下) *

平 野 順 雄

“Letter”—Carrier Olson: An Essay on *The Maximus Poems* of Charles Olson (2)

Yorio HIRANO

〔前号目次〕

序. 引き裂かれたテキスト

I. 犯 人

II. テキスト——「手紙 1」——

i. マクシマス ii. 投射詩人マクシマス

III. 花の都市グロスター

i. ヨモギギク ii. 不/在の都市 iii. 「花」の力

〔本号目次〕

IV. 崩壊する花の都市

i. 橋 ii. 花の戦略 iii. 地下の花 iv. 逆立ちする花

V. 始 原

VI. 語り手マクシマス対作者オルソン

VII. 「手紙」を運ぶオルソン

IV. 崩壊する花の都市

i. 橋

「花の都市」が崩壊するのは、グロスターをアメリカ本土と分かつ河（The Annisquam River）に橋（A. Piatt Andrew Bridge）が架けられ、Route128によってグロスターが本土と結ばれた時である。タイアに匹敵する「都市」たるための必要条件であったアメリカに対する「外部」性を失った今、グロスターは「元型都市」ではあり得なくなったのである。オルソンは嘆く。「海の都市は死んだ」と。

“Agh Gloucester/you are ugly/your streets are/your buildings/your young/you have gone/out 128/to the nation/& you stink/as it does...”

——1959年12月2日付の封筒の裏に書かれたオルソンの意見。¹⁾

“128 ends Gloucester as a sea city. After this, what is she but another part of the nation?”

——1960年のオルソンの書き付け。¹⁾

こうした背景とオルソン自身の嘆きを知る読者は、『マクシマス詩篇』第1巻を閉じる詩 *April Today Main Street* 最終数行の不安な響きの中に「花の都市」の崩壊を感じとらずにはいられないだろう。

as the mainland hinge

of the 128 bridge

now brings in

what,

to Main Street ?

(I. 160)

ルート128がグロスターのメイン・ストリートに運び込むものは、「都市」^{ボリス}の死をもたらしアメリカなのだから。

しかし、第1巻の終わりになってオルソンやマクシマスが「花の都市」の死を嘆くのは、実は奇妙なことなのだ。というのは、*April Today Main Street* (1959) が書かれる以前に、既にグロスターはアメリカの「外部」ではなくなっていたからである。マクシマスがオルソンの頭の中で生まれたのは「1949年から1950年にかけての冬」²⁾、『マクシマス詩篇』の執筆開始は1950年³⁾、そして問題の橋が架かったのも1950年だったのである⁴⁾。この事実は、*April Today Main Street* が書かれる9年も前に既にグロスターが「元型都市」としての資格を喪失していたことを意味する。そればかりではない。『マクシマス詩篇』開始とグロスターがアメリカに対する「外部」性を失うのは、ほとんど同時だったのである。だから、タイアとグロスターをそれぞれアレクサンダーの帝国とアメリカの「外部」として措定するオルソンの図式「アレクサンダーの帝国：タイア＝アメリカ：グロスター」⁵⁾は、初めから崩れていたと言わねばならない。「花の都市」は、崩壊するのではなく、初めから崩壊していたのである。

ii. 花の戦略

上でみた事実は、『マクシマス詩篇』第1巻の「花の戦略」を雄弁に物語る。第1巻をテキストとして成立させる努力の全体は、「花」がグロスターの「始原」を指すばかりでなく、「始原」を蘇らせる力を持つことによって支えられていた。「花」は崩壊した「都市」^{ボリス}グロスターを再び「元型都市」に近づける装置だったのである。中心から花卉を広げ円環をなす「花」。永遠に不在のこの世のものならぬ「元型都市」を中心とする「始原」の「花」である都市。「根」が絶えぬ限り、いつでも再生・開花しうる「花の都市」。こうした「都市」としてグロスターを描くことが、第1巻の「花の戦略」であった。戦略は二重だった。(1)開くことによって自立性^{アイデンティティ}を失い無価値となった空間を「花」のイメージによって囲い込み、聖別すること。(2)アメリカ化という墮落の未来に向って開いてしまった時間を「花」のイメージの中に吸収し、ついには無化し去ること。この両面作戦によってテキストの時空を構造化することが「花の戦略」だった。「花の戦略」とは、「花」のイメージによるグロスターの神話化に近ならなかったのである。

だとすれば、第1巻最後の詩 *April Today Main Street* は「花の戦略」の放棄を意味するはずだ。この詩中でグロスターが開かれてしまったことを認めた以上、テキストは神話世界に侵入する現実の時空を排除しえなくなるからだ。第1巻以後、グロスターは「元型都市」を蔵する「花の都市」ではありえないのだ。しかるにテキストは、第3巻に至ってもなおグロスターが「地上樂園」であると強弁する。

I'm going to hate to leave this Earthly Paradise

my
life is recently so hairy honkie—
hard & horny too to that extent I am far far younger
now than though of course I am
not twenty any more, *only*
the divine alone interests me at
all . . .
such a night or the recent day a
low tide then over Harbor Cove flashed
in my eye *as though a vessel was*
. . .
a view too Lane was
interested in as he spotted
a single red flower on the low tide's edge &
I that am over on any Dunkums
Federal Rubbish *picked vetch*
& took it to the Diner asking
the new summer waitress please
for a 2nd glass of water glass for
it I didn't know was vetch but
flowering weed: low tide night is
just the same the bright white moon
light slashing harbor water as
differently in look & sound as
waters noises coming up beside
this Ragged Arse Rock Earth
divine
upon such August low tide night (Ⅲ. 197—198. イタリアックス筆者)

その根拠は、グロスターが今も「聖地」であり、「花の都市」としての資格を失っていないという点にある。確かにそう言えるかもしれない。20歳の頃に戻った訳でもない「私」

に不思議な生命力の蘇りを体験させるばかりでなく、「聖なるもの」にしか惹かれなくなった「私」に、グロスターは、潮の低い月明かりの夜、メイン州の Ragged Arse Rock では見られぬ「聖なる」風景を見せるのだから。グロスターの「聖性」は疑いようもない。しかも、Harbor Cove 沖の低い潮流は「私」の眼に「船」のごとく映り、「私」はグロスターの風景画家 Fitz Hugh Lane (1804-1865) 同様、「花」とグロスターを睦み合わせることができのだから。「私」が摘んだ「花」をメイン・ストリートの一角にあるレストランのグラスに活けてもらうことができるグロスターは、確かに今も「花の都市」なのだ。

だがしかし、以上の事がグロスターを「地上樂園」と見る根拠になりうるか否かは、はなはだ疑問という他ない。これが根拠となるためには、他の地では「聖なるもの」が感じられないという保証が要るはずだからだ。無論、潮の流れが「船」に見えたことには意味がある。海の死者たちを葬い、葬いの中で海の死者たちの蘇りを体験することによって、「私」は「花の都市」に近づき得たのだから⁶⁾。そしてグロスターの「始原」と「船」とは切り離せないのだから。しかし、「花の都市」としては既に崩壊してしまったグロスターで、「私」が「聖なるもの」を感じとることができ、また、摘んだ「花」をレストランのグラスに活けてもらうことができたからといって、グロスターを「地上樂園」とまで言い切ることはできないのではなからうか。第1巻でなら、そう言い切ることもできたかもしれない。しかし、「花」によって時間を無化し、グロスターを特権的空間として聖別する「花の戦略」をテキストは放棄したはずなのだ。実際のグロスターが橋によって「都市」性を無残なまでに失なったことをテキストは認めてしまったのだから。だから、グロスターを「地上樂園」だと強弁する詩のすぐ後に、グロスターを「墮落の地」と断じる詩がつづくのは、矛盾であって矛盾ではないのである。

December 18th

And the rosy red is gone, the
2nd-3rd-story of
the Mansfield house, the darker
flower of the
street—oh Gloucester

has no longer a West
end. It is a
part of the
country now a mangled
mess of all parts swollen
& fallen
into
degradation, each bundle un-
bound and scattered

Gloucester too

is out of her mind and
is now indistinguishable from
the USA.

(Ⅲ. 202-204. イタリアックス筆者)

詩中の消え去った「バラの赤」は、グロスターのウェスト・エンドにあった由緒正しいマンスフィールド邸の2階と3階の煉瓦の色を指し、通りの「暗い花」は一度焼けたこの邸の1階を指す。⁷⁾ マンスフィールド邸は、旧町政庁舎^{タウン・ホール}とともに、グロスターの「始原」を偲ばせるウェスト・エンドの中心的建築物であった。⁸⁾ この詩が書かれる1968年12月18日の2年前にマンスフィールド邸の立ち退きは決まっていた。Tallys Mobil Service Station 拡充のためのこの決定に対して、利潤よりも街の美観と伝統を保持すべきだと考えるオルソンは反対運動を展開したが、立ち退きは実行に移されたのであった。⁹⁾ この一件をめぐるオルソンの憤慨と悲嘆が、この詩のサブスタンスなのである。注目すべきは、憤慨と悲嘆が、橋によって崩壊した「花の都市」グロスターの一角に残った「花」すらもアメリカの産業によって徹底的に駆逐されるという一事に向けられていることである。橋が運び込むアメリカの産業は、「花の都市」の息を止めるのだ。こうしたアメリカ化を是とし、「墮落してゆく」のであれば、いかにもグロスターは「気が狂っている」に違いない。この詩は「花の都市」グロスターの死亡宣言なのである。

しかし、アメリカとグロスターの等質化が直ちにグロスターの死を意味するという前提の正否は、放棄したはずの「花の戦略」を考えに入れられない限り、何とも決め難い。オルソンにとっては、アメリカが利潤追求以外の何の目的ももたぬ墮落の国であることが自明であるがゆえに、この前提もまた証明不要でありえても、¹⁰⁾ 読者にとってはそうではない。テキストはただ「始原」を偲ぶよすがとなる「花」=マンスフィールド邸を駆逐し、アメリカ化してゆくグロスターを墮落し、気が狂ったと非難するばかりなのだ。同じ詩中の“what was Main/street are now/fake gasoline station/and A & P supermarket/construction/the fake/which covers the emptiness/is the loss” (Ⅲ. 203-204) という断罪を見ても、アメリカ化=墮落・死を前提としない限り、ガソリンスタンドやスーパーマーケットを「偽物」とする根拠は見当たらないのである。つまり、『マクシマス詩篇』は、アメリカ=墮落の地を疑問の余地なき大前提とし、それがために「花の戦略」を放棄した今でも、「花」によるグロスターの神話化を捨てきれないのだ。だからこそ、グロスターの死亡宣言に駆逐される「花」のイメージを用いなければならなかったのだ。

こうしたテキストのあり方は、グロスターを「地上楽園」だと強弁する詩でも同様であった。そこでもグロスターを「地上楽園」と断じる根拠が明示されぬまま、「花の戦略」の存続を前提とする「私」の判断の結果が強引にテキストを形成していたのである。グロスターを「地上楽園」だと称揚するにしても、「墮落の地」と断罪するにしても、その判断を導き出すグロスターの実体そのものは描かれることなく、「花の戦略」を支持しうる都市であるか否かによって、グロスターに対する判断は決まっていたのである。放棄されたはずの「花の戦略」がしぶとく生き続けるために、読者は、「聖地」=グロスターと「墮落の地」=グロスターという正反対の極に引き裂かれた判断の両方に立ち合うことになるが、グロスターの実体に出会うことはないのである。読者が足を踏み入れたのは、実体を神話的に構造化しようとする実体解釈の枠組みによって、実体それ自体が正反対のものに変わ

りうる世界なのだ。そればかりではない。神話的構造化に足る実質を実体を持たなくなった時には、実体の方が神話的構造化の枠組みに強引に適合させられる世界なのだ。

それはまた、比喻と実体とが逆転した世界でもある。「始原」のグロスターの比喻として定着された「花の都市」のヴィジョンは、実際には「花の都市」などではありえようもなくなったグロスターを、是が非でも「花の都市」たらしめようとするからである。テキストは比喻を実体とし、実体を比喻の中に吸収し尽そうとするのだ。この時、第1巻で措定した「根の都市」¹¹⁾の概念が、放棄された「花の戦略」に替わる「花の論理」を提供する。地上の「花の都市」がいかに「都市」^{ポリス}性を失い、墮落して腐った「花の都市」になろうとも、「元型都市」にまでのびたその「根」が生き続ける限り「花の都市」はいつでも再生しようとする遙かに逞しい「花の論理」が、第1巻以後テキストの背後で密やかに生きるしかなくなった「花の戦略」に替わって、徹底的に壊滅したはずの「花の都市」を蘇らせようとするのである。グロスター断罪につづく「地下の花」のヴィジョンは、¹²⁾ 比喻の論理に他ならぬ「花の論理」の要請によって呼び起こされるのだ。

iii. 地下の花

flower of underworld

to build out of sound the walls of the city

& display

in one flower the underworld so that,

by such means the unique

stand forth clear itself

shall be made known

(Ⅲ. 194. イタリックス筆者)

引用2行目の「音によって都市の壁を築く」は、Zeusの息子 Amphion が Hermes に習った堅琴の調べによって自らの治めるテーベの城壁を築いたという音楽による都市建設の神話を想起させずにはいない。この神話を背景にすることによって、詩中の「たった一輪の花の中に地下世界」を見せ「唯一無二なるもの」を知らしめる「地下の花」は、あたかも楽の音に応じて地上に出現する機会を地中で待ち続けている「都市」であるかのように見える¹³⁾。だとすれば、「地下の花」は「根の都市」の別名なのかもしれない。しかし、「花の都市」の根幹を成し且つ聖なる「元型都市」にまでその根を伸ばしていた「根の都市」は、いつでも「花の都市」として地上に開花する潜勢力を保持していたのに対し、安らかに地中に咲く「地下の花」はあくまでも地下都市として留まり、決して地上に姿を現わすことはないのではなからうか。音楽都市の神話と陸み合っていた「地下の花」のヴィジョンが、引用4行目の“so that”を境に、「唯一無二なるもの」という抽象概念を知らしめる手段に墮してゆく様を見るがよい。「地下の花」は、「根の都市」の無能な陰画にすぎないのである。

地上には存在しえようもなくなった「花の都市」が地下世界に追いやられ地上への出口を塞がれたものが「地下の花」なのであるとすれば、そして地上の「花の都市」を壊滅させた元兇が橋なのであれば、「花の都市」は架橋以前のグロスターを呼び起こすことによ

て、過去における自らの確たる存在を主張できるはずだ。しかし、過去への退行の途はテキスト自体によって既に断たれていた (I'd not urge anyone back. Back is no value as better. That sentimentality/has no place, least of all Gloucester,/where polis/still thrives//Back is only for those who do not move 1. 22)¹⁴⁾ ために、「花の論理」は行き場を失い、「花」そのものを逆立ちさせるに至る。

iv. 逆立ちする花

Out of the light of Heaven the flower
grows down, the air
of Heaven

(Ⅲ. 178)

「天の光」の中から生まれた「花」が、その根をグロスターにおろそうとするとも、あるいは根が「天の光」の中にあって、そこから「花」が逆さに育ち、グロスターを「花の都市」にするとも、どちらにも取りうるこの美しい詩は、前者ととれば、グロスターが「根の都市」であることになり、「天の光」から生ずる「花」はそのまま天国であることになる。しかし、グロスターを「花の都市」とすることが『マクシマス詩篇』全体の構造化の要であったことを知るわれわれは、この詩を是非後者の「逆立ちする花」のヴィジョンととらなければならない。

神話的な美しさに満ち、宗教性すら感じさせるこの「逆立ちする花」のヴィジョンは、しかしながら、地上にも地下にも過去にもその存在を主張しえなくなった「花の都市」が、その「根」を「天の光」に求めざるを得なくなった結果生じた苦しまぎれのヴィジョンなのである。1966年に書かれたこの詩は、¹⁵⁾ 1962年に書かれた同主題の詩¹⁶⁾ (Imbued/with the light/the flower/grows down/the air/of heaven III. 18) 同様、中国の瞑想の書 *The Secret of the Golden Flower*¹⁷⁾ 中のイメージ系列「黄金の華」=「光」=「超越的一者」にその宗教性を支えられている。とりわけ、このイメージ系列の核をなし、本質と生命を蔵する不可視の「天の光」にその宗教性を負っているのだ。

Master Lu Tzu said: That which exists through itself is called Meaning (Tao). Meaning has neither name nor force. It is the one essence, the primordial spirit. Essence and life cannot be seen. It is contained in *the Light of Heaven*. The Light of Heaven cannot be seen...

The Golden Flower is the Light. What colour has the Light? One uses the Golden Flower as an image. *It is the true power of the transcendent Great One...*

― *The Secret of the Golden Flower* 中オルソンが印をつけた箇所¹⁸⁾ (イタリックス筆者)

「超越的一者」の力の象徴たる「天の光」が道教の悟達者の瞑想のただ中に「黄金の華」となって立ち現われる至高の境地への手引 *The Secret of the Golden Flower* は、「逆立ちする花」のヴィジョンに明解な説明を与えるかに見える。¹⁹⁾ というのは、下降する「天の光」

と上昇する瞑想の出会う地点で瞑想者が「黄金の華」に転化する境地が、この手引書の指し示す至高の境地なのだから、詩中の「天の光」をこの書の「天の光」と同一のものと考え、グロスターを道教の瞑想者と見れば、人格グロスターは瞑想の最高段階で「黄金の華」と化し、今一度「花の都市」たりうるからだ。しかし、そう考えなければならないとすれば、テキストはここに来て唐突に「超越的一者」を指定し、かつ「花」に道教的悟達の最高段階で初めて許されるヴィジョンという意味限定を設けざるを得なくなる。その結果、テキスト『マクシマス詩篇』は、深遠な別のテキストの派生物に墮してしまうだろう。むしろ、われわれはこう考えなければならない。*The Secret of the Golden Flower* が「逆立ちする花」のヴィジョンを成立させたのではなく、テキストを構造化し成立させようとする「花の論理」によって生まれた「逆立ちする花」のヴィジョンが、*The Secret of the Golden Flower* を呼び込み吸収したのだ、と。

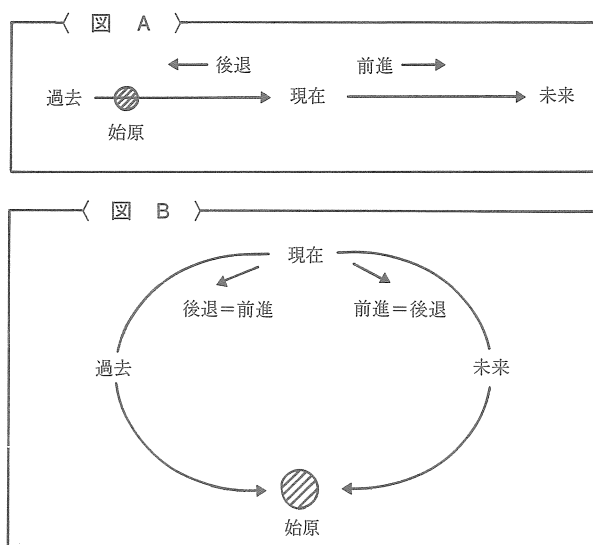
その背景もしくはヒントが何であったにせよ、「逆立ちする花」のヴィジョンの持つ宗教性は疑うべくもない。そして、この詩の抒情性と祈りの純度の高さは、道教的限定を超えているにちがいない。しかし、ここでもわれわれは、グロスターを「地上樂園」だと強弁する詩を見たときと同じ問題に遭遇する。問題とは、「天の光」から逆さに育つ「逆立ちする花」が、その花卉を地上に降ろし都市を包み込むことによって、地上に「花の都市」を現出させるにしても、その「花」につつまれ「花」と化す都市がグロスターでなければならないとする根拠が、この詩のどこにも見出せないことである。この詩においても、グロスターの実体は何一つ描かれぬまま、グロスターよ「花の都市」であれかしという祈りが虚空に向けて投射されるにとどまるため、「逆立ちする花」の花卉はグロスターに着地することがついにできず、宙吊りになる他ないのである。従って、「逆立ちする花」のヴィジョンは、「地下の花」のヴィジョンが「根の都市」の無能な陰画であったことと同様、地上に「花の都市」が出現することの不可能性をむしろ強調する結果に終わるのである。

ならば「花の都市」は、やはり時間を遡ることによってしかこの地上での存在を主張し得ないことになるだろう。ただし、架橋以前などへではなく、グロスターの「始原」まで時は遡られなければならない。しかも、前向きに。

V. 始原

「前向きに時を遡る」という名辞矛盾をテキストは是非犯さなければならない。「花の都市」が存在したであろう「過去」への「後退」を「感傷」にすぎぬと喝破した以上、そして地下にも天上にも「花の都市」も「根の都市」も見出し得ぬ以上、実体性の希薄な「花の都市」の確たる實在に近づく唯一の途は、「後退」であるはずの過去向きの動きを、「始原」を目指す「前進」運動に転化する途以外にはないからだ。テキスト成立を指向する「花の論理」は「後退」≠「前進」を「後退」=「前進」に変換しなければならないのだ。

この変換を可能ならしめるために、「花の論理」は過去へ向かう「後退」がそのまま未来へ向かう「前進」となる時間軸を作り出さなくてはならない。それは、過去から現在を通して未来へと流れる通常の直線的時間軸（図A参照）ではなく、時間を遡った果てに見出される「始原」の「花の都市」が、未来をもそこに呼び込む円環状の時間軸（図B参照）である。この時間軸においてはじめて過去への「後退」が未来への「前進」となるだろう。



しかしこの時、「始原」の「花の都市」は、過去の一点において存在した時の中の都市であると同時に、時を超えた「来たるべき都市」でもなければならぬことになる。過去の事実（時間の中）に根をおろしつつ、神話性（無時間）をも孕まなければならないとは、何という困難を「花の都市」は担ってしまうことか。「後退」＝「前進」のパラドックスを生きる「花の都市」は、時間（事実）と無時間（神話）の間で引き裂かれてしまわないだろうか。こうした不安をよそに、テキストはグロスターに果敢なる時の遡及を命ずる。

I compell
backwards I compell Gloucester
to yield, to
change
Polis
is this

(Ⅱ. 15)

だが、時を遡るグロスターは果たして「変化」し、大文字の「都市」すなわち「元型都市」になりうるのだろうか。また、大文字の「都市」たりえたとしても、その時グロスターは元型の中に吸収されてしまい、グロスターという固有の地でありつづけることができなくなるのではなからうか。この疑問に答えるためには、われわれは先ず、グロスターの「始原」たる「花の都市」がどのように構成されるのかを見なければならぬだろう。

「始原」を構成するためにテキストは二つの方法をとる。その一つは、「始原」に関する諸事実を積み重ねてゆく方法であり、もう一つはグロスターを神話的に定位する方法である。第一の方法による「始原」構成は以下のようになる。

THE PICTURE:

- 1623 voyage of discovery, ship unknown, Bushrod backer
(John Watts factor ?)
- 1624 1st season Dorchester Company, the *Fellowship*,
35 tons, 14 men left Stage Head
- 1625 2nd season 32 men left, two ships the *Fellowship*
and the *Pilgrime*, 140 tons (which returned to Eng-
land with little more than a third part of her lading)
- 1626 last season, the *Fellowship*, the *Pilgrime* and the
Amytie, 30 tons, Capt Isaac Evans bringing
6 cattle
- & 1627 a final voyage, backed by eleven enthusiasts from
the former Company ship's name unknown but John
Watts factor, carried 20 more cattle for Roger
Conant & his faithful; Watts took salt
- END, scene shifts to Salem, and then Boston, and there be
11 years until fishing once more, and then a Colony matter,
returns to le Beau Port (I . 116)

リスト最上段の1623年の項は、アン岬に恒久的な漁業プランテーションを作る可能性が有るか否かを確かめるために、英国 Dorchester の商人 Richard Bushrod が調査船を派遣したことへの言及である。彼は英国枢密院から許可を得て、John White, John Watts らとともに Dorchester Company を設立し、アン岬に漁業都市を作ったのだ²⁰⁾。これがグロスターの「始原」であった。1624年以降の項は、Dorchester Company がアン岬へ向けて出航させた船の名とその積荷および船長名の記録である。以後、漁業都市の候補地が Salem を経て Boston へ移り、11年後 le Beau Port と呼ばれていたグロスターに戻ってきたことを引用最終3行は教える。「始原」に関する事情をいまだ詳しく記せば、「手紙 23」のようになる。

Letter 23

The facts are:

- 1st season 1623/4 one ship, the *Fellowship* 35 tons
with Edward Cribbe as master (?—cf.
below, 3rd season)
- left 14 men Cape Ann :
John Tilly to oversee the fishing,

Thomas Gardner the “planting” (meaning,
the establishment, however much a bean row,
and some Indian corn; much more salt,
was the business.) The two of them
“bosses”, for a year

But here is the first surprise: all the evidence is, that the Plymouth people, aboard the *Charitie* (carrying Lyford & some cattle, and Winslow with the Plymouth Co's patent to Cape Ann) got in from England before the above Dorchester fishermen made it, and the Pilgrims had their stage up when these others did arrive, five weeks out of Weymouth. It was this fishing stage which was fought over the next season, when the Plymouth men returned to find that Westcountry fishermen had preempted it; and Miles Standish was sent for, to fight about it. (I. 99–100)

「手紙 23」は、Dorchester 近くの港 Weymouth からアン岬へ向けて船出した the *Fellowship* 号の一团による第一回目の入植の試みとその顛末を教える。船長は Edward Cribbe, アン岬に残った人数は14人, 漁業を John Tilly が指揮し, 土地を居住可能にした責任者は Thomas Gardner であったのだ, と。しかし, the *Charitie* 号に乗って Plymouth に来ていた者たち——その中には, この地の最初の聖職者 John Lyford, そして the *Mayflower* 号に乗って1620年この地に着いた後, 一度英国へ戻ってアン岬をプランテーション化する特許状を取得していた Edward Winslow がいた——が Dorchester Company の面々より先にアン岬を漁業地として開発していたため, 第二回目の入植を試みた Dorchester 側と漁業権をめぐる争いが起こる。ところが Winslow の特許状には効力が無いことを Plymouth 側は知ってしまう。Bristol 付近の漁師達が以前に漁業権を取得していたからである。そこで Plymouth 側は軍人 Miles Standish に救援を求める……こういった事情が「手紙 23」によって知られるのである。²¹⁾

『マクシマス詩篇』は, この種の事実を提示することによって「始原」を構成しようとする試みに満ちている。その際の「事実」とは, 主に J. Babson, *History of the Town and City of Gloucester* (1860); *Notes and Additions to the History of Gloucester* (1879; 1891), W. Bradford, *Bradford History “Of Plymouth Plantation”* (1898), John Smith, *Travels and Works of Captain John Smith* (1910), F. Rose-Troupe, *John White, the Patriarch of Dorchester and the Founder of Massachusetts, 1575–1648* (1926) および Copeland and Rogers, *The Saga of Cape Ann* (1960) などからの転写と抜粋によって得られたものである。²²⁾ こうした「事実」によって「始原」を構成しようとする「歴史家」オルソンは, ツキユジデスであるよりはヘロドトスたらしとする (I would be an historian as Herodotus was, looking/for oneself for the evidence of/what is said, I. 100–101)。出来事を「報告」するツキユジデスではなく, 自らの足で能う限りの資料を捜し, その後初めて歴史を「語る」ヘロドトスを範とするのである。

Obviously the word “history” is a word—unless you take it to root—which doesn't have any use at all. And the root is the original first use of it, in the first chapter if not the first paragraph of Herodotus, in which he says “I'm using this as a verb *'istorin*, which means *to find out for yourself...*” After all, Herodotus goes around and finds out everything he can find out, and then he tells a story. It's one of the reasons why I trust him more than, say, Thucydides, who basically is reporting an event.

——1963年7月29日 Vancouver 会議でオルソンが「歴史」について語ったこと。²³⁾
(下線筆者)

ヘロドトスの弟子たらしとするオルソンは、ドキュメントを批判的に読み、自らの疑問や主張を「事実」に書き込みながら「歴史」を語る。²⁴⁾『マクシマス詩篇』の「始原」構成は、おおむねこの原理によって行われるのである。

こうして行われる「始原」構成の中核をなすのは、無論、漁業都市グロスターの成立である。より詳しくは、アン岬入植の原動力となった John White のセトルメント建設の営為と彼の組織した Dorchester Company の入植の試みの実際である。上述の漁業権をめぐる争いの経緯を描く *History is the Memory of Time* (I. 112–114)。アン岬に漁業地を見出した John Smith を「シーザーの夢」を持つ者とする *Some Good News* (I. 120–127)。グロスターの初期入植者たちがどのように街を造って行ったのかを彼らの名と住んだ場所の固有名とともに丹念に記述する *Letter, May 2, 1959* (I. 145–151)。また、入植者たちがインディアンに対して身を護ろうとしつつも、いかに悩まされ続けたかを伝える DECEMBER, 1960 (II. 24–30)。そして、職業・結婚・住居の購入が記載されている文書を用いて入植者たちの生涯を描こうとする詩群 *Further Completion of Plat* (II. 42), *Thurs Sept 14th 1961* (II. 59–62), “having developed the differences...” (III. 134–136)。New England の漁師たちの暮らしぶり——海で働いて得た大切な賃金を陸に上がるとほとんど酒に使い果たすため、靴や靴下すら買えなくなり、詰まるところ商人にした借金のために商人の奴隷になり下がる——を描く *o John Josselyn you* (II. 39–41)。これらのディテールによって、テキストは「始原」の実情を浮かびあがらせようとするのである。

「始原」を構成するもう一つの方法は、神話的かつ元型的にグロスターを定位する方法である。

& in these
troubled
stories
of our Selves, of our
Parents and their repeated
occurrence
Each Turn of Earth
Before Our Own Eyes
Each Day She

Turns Her Back on
Sun, And Night
brings Heaven
to Her to
Begin Again, Love
And Man Shall Continue To Be the Mystica of
This One System Flying
Loose in the melee of the
Universe
And the Perfect Bowl
of the Sky of Gloucester
in which these Events
May be Seen
Each Evening Hour
Each Day before
Night comes
to cover Heaven's
approach, to make Love to
Earth
And bear Us
as our Ancestors were
So Borne
——“The hour of evening...” (現行版 562–563)²⁵⁾

「夕べの時」が見せるのは、人間を「神秘」(the Mystica) たらしめる宇宙の壮大な動きである。日ごとに地球が太陽に背を向けることによって生ずる夜が、天を大地に導き、愛の営みを再開させる。天と大地を愛し合わせるこの宇宙機構が人間を生み、「神秘」たらしめるのだ。こうした出来事が、完全な球体たる「グロスターの空」に夕べごとに見られる、と詩は語る。更に、「夕べ」は、われわれ自身とわれわれの親たちの平らかならぬ生涯の中にあり、かつ、われわれとわれわれの祖先たちは夜のもたらす大地と天の愛の営みによって生まれるとされるのであるから、「夕べの時」が見せるものは、マクロコズムたる宇宙とミクロコズムたる人間が互いに相手を包含しながら結び合う時空と身体 of 神秘なのである。「夕べの時」に、こうした神秘を見せる「グロスターの空」は、特権的空間であらざるを得ないであろう。このようなグロスターなら、天から逆さに育つ「花」に包み込まれ、「花の都市」に変容しても不思議はない。しかし、こうしたグロスターの神話的的定位は、グロスターの「始原」＝「花の都市」を突き抜け、グロスターを「元型都市」として描き出してしまふ。あまりにも特権的な「グロスターの空」は、グロスターの空であることを必要としない程に、元型をうかびあがらせるのである。

「始原」に関する歴史的諸事実の集積によって「始原」を浮かび上がらせようとする第一の「始原」構成法と、神話的にグロスターの「始原」を定位しようとするこの第二の「始

原」構成法とが浸透し合い、互いに他を支えるならば、「始原」のグロスターはテキスト内にかかりとした骨格をあらわすはずである。生硬な諸事実の記録が神話の相に吸収され、「始原」のグロスターを静止した全体として感ぜしめ、また神話的ヴィジョンが諸事実を支える枠組みを提供し、諸事実^{リアリティ}に浸透し諸事実を永遠化するならば、「始原」の「花の都市」グロスターは、テキスト内で確たる実在感を獲得するはずである。テキスト作成上の願いをそのまま詩としたロバート・ダンカン宛ての「手紙」は、「始原」構成の第一の方法と第二の方法との相互浸透によって生ずる「花の都市」の実在感こそが『マクシマス詩篇』の目指すところであったことをはっきりと示している。

for Robt Duncan,
who understands
what's going on
—written because of him
March 17, 1961

My problem is how to make you believe
these persons, who lived here then, and from these roads
went off to fish or bought their goods 1 mile and a half
further north, at George Dennison's store, or were
mariners—sailors—and a few farmers (Ⅱ. 38)

第一の方法と第二の方法との間に「始原」の「花の都市」が実在感をもって浮かび上がるか否かは、グロスターの「始原」の住人たちをテキストが生き生きと描き出しうるか否かにかかっていたのだ。しかし、「始原」を描く二方法は浸透し合わず、ドキュメントからの転写と神話的元型の二つに割れたままであるため、「始原」を生きた人物がくっきりとした輪郭を持って立ち現われることはなく、またそうした人物たちが「始原」の「花の都市」のあり様を浮かび上がらせることもないのである。「始原」造りの原動力になった者たちであり、従って『マクシマス詩篇』全体を通してスポットライトを浴びつづける人物たち John Smith, John White, John Winthrop ですら、その名と行為がドキュメントからの転写によって極めてぶっきらぼうにテキスト内に投げ出されるばかりで、血肉を具えた人間として読者の前に立ち現われることはついにない。生き生きと描き出されるのは「始原」の人々ではなく、むしろ現在に近い人々の感情なのである。例えば、漁港都市の民すべてにとって戦慄すべき難破の恐怖（1862年と1867年の海難を題材とする *1st Letter on Georges* [Ⅰ. 136—138] ; *3rd Letter on Georges* [Ⅱ. 107] ; *Cashes* [Ⅱ. 19]) や、自慢の闘牛の技量を示そうとして酒に酔いつつも牛と闘って死んだ「ハンサムな船乗り」James Merry (1892年没) の無念 (MAXIMUS FROM DOGTOWN—1 [Ⅱ. 2—6])、あるいは市議会のパーティ席上で大勢に与せず一人だけ署名を拒否し、「生涯何も成し得なかった男」と侮辱され、じっとテーブルに眼を落して耐えた政治家 John Burke の怒り (1958年の事件, John Burke [Ⅰ. 142—144] ; J1 17 1761 [Ⅱ. 52]) は鮮明に伝わる。これらの人物の姿はその感情もろとも確かな実在感を持ち、テキスト内で永遠化されているの

2

that city Obadiah Bruen
1st Town Clerk of Gloucester
went on [from New London] to from after
having come to Gloucester from
Strawberry Bank? how many waves
of hell and death and
dirt and shit
meaningless waves of hurt and punished lives shall America
be nothing but the story of
not at all her successes
—I have been—Leroy has been
as we generic failures are
successes, here
it isn't interesting,
Yankees—Europeans—Chinese

What is the heart, turning
beating itself out leftward

in hell to know heaven
in this filthy land

in this foul country where
human lives are so much rash

It is the dirty restlessness
of fear and shame—human shame which doesn't even know how right

it is to hate what ignorance
pervades

the social climbing of this
Ararat this mountain

of rubbish taken from used up anything and made a hill and home for
rats big scared ran my father and I shot
off the back porch Worcester

as the rats came closer
as they filled the Athletic Field

—and Beaver Brook Goddamn US Papers
with my 12

he
gave me
and I don't have now to give

(III. 120)

3

in counter
in your Praise
this poem
to write
My beloved Father
turning this page to Right
as Your Son
Beloved Father
goes forth to create
Paradise
Upon this Earth
Secular Praise
of You and the
Creator
Forever
And an end to Hell
—end even to Heaven
a life America shall yield
or we will leave her
and ask Gloucester
to sail away
from this
Rising Shore
Forever Amen [...]

(III. 121)

ドキュメントの転写による「始原」構成と神話による元型的「始原」定位とが、相互に浸透し合い、ドキュメントと元型の間に「始原」が浮かび上がるはずであったのに、ドキュメントは「始原」の死んだ記録の断片でありつづけ、神話はグロスターの「始原」を突き抜けた「元型」を前面に押し出してしまうため、両者の間に「始原」が生き生きと立ち現われることはついになかった。こうした「始原」定位の挫折の果てにわれわれが見せられるのは、「空白の始原」への動きを視覚化しつつ、言語によってではなく、タイポグラフィーによって何事かを語ろうとする絵のような詩なのである。²⁷⁾

1は、時を遡った果てに見出しうるはずの「始原」の「花の都市」の「花」であろうとする詩であり、途切れた最終行（最終語）が第一行へ回帰しようとして果たせぬ2は、時を前向きに遡ることの困難を示しているように見える。3は、困難極まる前向きの時の遡及によって「花の都市」の「花」が見出せるならば、「花」全体はこのような葉と茎を持つであろうという夢想を示すだろう。微視的に見れば、1の右下にはこの詩の書き手 Charles Olson の名と書かれた年を示す数字1965があり、上方には Migration in fact というこの詩のタイトルが記され、中央の左斜め下に This is the Rose of the World というフレーズがあるのはわかるが詩としての意味はわからない。²⁸⁾ 2は、グロスター初代の町政記録係 Obadiah Bruen に関する記述に始まり、²⁹⁾ 汚辱の地獄の地に墮落してゆくアメリカを描く。汚辱の地獄アメリカでは、オルソン自身、父に渡された銃でごみの山から住居へ押し寄せてくる鼠を撃たざるを得なかったが、息子にはそんな事をさせずに済むという希望を記してこの詩は閉じる。事実であり、かつ汚辱の地アメリカのシンボルともなるごみ山をうろつき回る鼠からオルソンの息子が自由になるのは、タイポグラフィーの示す方向どおり、“fire”で終わるこの詩の時が、現在のアメリカもろとも Obadiah Bruen の生きたグロスターの「始原」へ回帰してゆく場合だけである。3は、「始原」へ向けての時の遡及が必要であることをはっきりと記している。「私」が「息子」として「父なる神」を讃え、この世のパラダイスを現出せしめる詩を書くためには、詩は時計の逆回りに円を成すように書かれなければならないのだ、と。そして「私」はグロスターに向って呼びかける。この地アメリカから船出せよ、と。

だから、このままの形では読み得ぬ1を除けば、これらの絵のような詩は詩として読めないわけではない。しかし、これらの詩においては、やはり言語よりもタイポグラフィーの方により強いインパクトとメッセージがある。言語がむしろタイポグラフィーに貢献しているのだ。1は、「始原」の「花の都市」がこのような読み得ぬ形でしか描けぬことを示すであろうし、2は、汚れなき「始原」回復に不可欠なアメリカという地獄の浄化がいかに困難であるかをはっきりと示している。途切れた最終行の示す現在の「私」の位置と冒頭の Obadiah Bruen との間に横たわるテキスト内の途方もない距離は、「始原」へ回帰することの困難をこの上なく雄弁に物語ってはいないだろうか。そして3は、葉も茎も具えた生きた「始原」の「花の都市」を呼び起こすためには、地獄であるアメリカを救う可能性がないことを認めて、ひたすら神に時の逆行を祈る他ないことを示しているのである。「花」の中心にある「わが愛する天の父」、および茎にあたる部位の最終語「アーメン」は、「花の都市」が時の逆行運動を願う不可能な祈りの中にしかないことを示さずにはないだろう。特に、この3は『マクシマス詩篇』全体が孕む論理的あやうさを象徴しているように見える。というのは、「花の都市」を正当に回復するために不可欠なアメリカそのも

の浄化を完全に諦めながら、「始原」のグロスターをアメリカから切り離して呼び起こそうとする努力が実は不可能な祈りでしかないことを、この詩は視覚化しているからである。

これらの絵のような詩は、「始原」の「花の都市」が言語によってはついに描き得ぬことを示す、詩のような絵なのである。そして、詩のようなこれらの絵——それは、「花の戦略」に替わって登場したにも拘らず、ついに「花」の比喩によってテキストを構造化するには至らず破綻した「花の論理」の哀れな末路の画像でもある——は、「始原」の回復が不可能であることのみならず、「始原」そのものが空白でしかないことを残酷なまでに暴露しているのである。

ならばわれわれは問わねばならない。「花の論理」を破綻させ、テキストを解体の危機に追い込む「空白の始原」へのあくなき遡及運動を惹起したものは何か、と。

Ⅵ. 語り手マクシマス対作者オルソン

「空白の始原」へのあくなき遡及運動を惹起したものは、『マクシマス詩篇』自体の未完結性であった。以下の三篇の詩は、なぜ『マクシマス詩篇』が決して完成し得ぬテキストであるかを教えてくれる。

(1) LETTER 20

II

The world of *Hannas*

(the world of Earp)

went with the blueberries,
the chestnuts

with the openness the exploiters
had not beat out, was still walking, was going places
in street-cars

Not that the state of it
needs crying over. The real

is always worth the act of
lifting it, treading it

to be clear, to make it

clear (to clothe honor
anew

(I. 92. イタリアックス筆者)

「ハナスの世界」や「アープの世界」——ブルーベリーやクリの実と調和し、搾取者たちもついに駆逐できないのびやかさがそこにはあった——は今はもうないが、こうした誉

高いリアルな世界は、常に取り上げて明らかにする必要がある、とするこの詩は、かつてあったよき世界の不滅をうたっている。ここで、かつてあったよき世界の記号となる「ハナス」(Hannas)は、同じ「手紙 20」の先行する箇所に出てくる「ハンナ」(Hanna)と同一人物であるに違いない。なぜなら、オルソンが聞き知っているのは「ハンナ」であって「ハナス」ではないからだ。「ハンナ」は、オルソンが教師をしていたブラック・マウンテン・カレッジの学生ジャック・ライスの友人の名である。オルソンが、やはりブラックマウンテンの学生であったジャック・ライスの兄弟から聞いた「ハンナ」の話はこうだ。第二次世界大戦中、海軍落下傘部隊の訓練生であったライスと「ハンナ」は、互いの信頼を裏切らぬために蒼ざめながらも各々の持場を守り、その結果ライスはふくらはぎにナイフの傷を受け、「ハンナ」は踵の骨を破損したのだ、と。³⁰⁾

Professor stuff,
Red *Hanna* called Red Rice's
yack-yack

yet it was between these two
tried trust,
at 20 paces,
M-12's
at a hundred yards

to stand to it, to see
if though they blanched they'd hold,
they'd chance
the other's
error

(I. 89. イタリアックス筆者)

だから「ハナス/ハンナの世界」とは、信頼に応えるためには危険に身を曝し負傷することをも辞さぬ覚悟を持つ者たちが生きた誉高い空間の謂であって、それゆえ西部開拓史上に名をとどめるガンマン、ワイアット・アープ (Wyatt Berry Stapp Earp, 1848—1929) の世界ともつながりうるのである。こうした世界が今はないことを嘆く必要はない、とこの詩の語り手は言う。だが、この詩の「語り手」とは一体誰か。

『マクシマス詩篇』の語り手はマクシマスであったはずである。だから、この詩の「語り手」もマクシマスであって然るべきだ。しかし、そうであるなら、なぜ詩中の同一人物が「ハナス」と「ハンナ」に割れなければならなかったのか。見事に遠景化され、ワイアット・アープと共に、今はなきよき世界の記号たりえている「ハナス」と、何をなしたのが必ずしも伝わりやすくはない「ハンナ」とのテキスト表層における割れは、「語り手」であるはずのマクシマスと『マクシマス詩篇』の作者オルソンとの間の不和と癒着を示しているのではなからうか。オルソンが自分の学生から聞いた「ハンナ」のエピソードを、いかにもマクシマスが語るにふさわしい「ハナス」伝説に転化する際に、「ハンナ」がオルソンと共にテキスト表層で自らの存在を主張して譲らないのだから。

こうした語り手と作者の間の不和と癒着、より正確には癒着による不和が、テキストの表面に露呈されるのはこの「手紙 20」においてでだけではない。³¹⁾そして、マクシマスとオルソンがテキストの表面で自らを主張する限り、『マクシマス詩篇』は確たる「語り手」を持ち得るはずもないのである。その結果、テキストはテキスト内に存在しようもない収斂地点を求めて永遠に動いて行かざるを得なくなる。マクシマスとオルソンとの癒着による不和が、「語り手」を二つに裂き、テキストを未完に終わらせるのである。

(2) Letter 72

of love & hand-holding sweet flowers & drinking	
waters) Hilton's & Davis', Davis' the	
	<i>garden of Ann</i>
\get back to	<i>& Elizabeth & Eden</i>
Nasir Tusi	& where I fall
	5
man is the fallen angel	
and after Davis' swamp—Joshua Elwell	
sitting high in heaven	
	evident presence of rock-tumble
	gives the road, & center, its
	30
	moor character— <i>moonscape</i>
	<i>and hell</i>) the Commons is
	garden, and manor, ground rose
	& candle
	shapes of spruce & bayberry garden
	35

(Ⅱ. 53–54. イタリアックス筆者)

ここでも、かつてあったよき世界が呼び起こされる。「アン」や「エリザベス」の「庭」は、「エデンの園」のエクタイプとなり、墮天使たる人間の一人である「私」に帰るべきところを教えているように見える。「私」の今いるグロスターの一地点は月明かりに照らされた「地獄」なのだから、「私」は是非「アン」や「エリザベス」の「庭」に帰らなければならないだろう。だが、元型的かつ神話的に「エデン」への帰還を促すこの詩中の「アンの庭」と「エリザベスの庭」は、どこにあるとされているのだろうか。「私」が墮ちる以前にいた「エデン」は、「アン女王」や「エリザベス女王」のいたイギリスと重なりはしないだろうか。イギリスからの移民によって成立したこのグロスターが「地獄」であり、「帰る」(\get back to, l. 4) べきところが「エデン」であるのならば、イギリスという「庭」が「エデン」のエクタイプに見えても不思議はないからである。

しかし、そうではないのだ。「アン」はサミュエル・デイヴィスが1704年に娶った妻の名であり、「エリザベス」はオルソン自身の妻の名なのだから。³²⁾そして、デイヴィスと共に2行目に現われるヒルトンも初期のグロスターへの入植者であり、1711年に結婚した人

だから、³³⁾「エデン」のエクタイプとされる「庭」は、まず第一に17世紀末から18世紀初頭にかけてのグロスター、とりわけデイヴィスやヒルトンの住んだドッグタウンと呼ばれるグロスター内陸部の「愛の庭」を指し、第二にオルソン夫妻の「愛の庭」を指すだろう。1行目から2行目にかけて描き出されるのは、質朴健康な「愛の庭」以外の何物でもないのである。

ならば、帰るべきところとは17世紀末から現在まで変わることなく存在し続ける「愛の庭」なのであろうか。あるいは、13世紀イランの神学者 Nasir Tusi の、神話がそのまま現実であるような精神世界なのか。³⁴⁾それとも墮罪以前の「エデン」なのか。答は開かれたままなのである。³⁵⁾答を開かれたままにしつつ、「手紙 72」はやはり初期の入植者であったジョシュア・エルウェル (1687年生れ)³⁶⁾が天に座すグロスター、とりわけドッグタウンあたりを「エデン」のエクタイプとして定着しようとする (ll. 7-8)。この地ドッグタウンが「地獄」に見えようとも、「入会地」(the Commons)³⁷⁾と呼ばれるこここそ「庭」なのだ。バラが咲き、トウヒがろうそくの形にすくと立ち、ベーラムノキの植わった「庭」(ll. 32-35)、デイヴィスもヒルトンも、そしてエルウェルもその近くに住んだこの「入会地」という「庭」こそ、入植の時代から現在まで続く「エデン」のエクタイプなのだ、と「手紙 72」は言うのである。³⁸⁾

だが、どうなのであろう。初期入植者たちの「愛の庭」と、この「入会地」という「庭」とは、場所が同一であることによって本当に結びついているのであろうか。テキストが作り出そうとして未だ作り出し得ていない「始原のグロスター」という神話と、現実のグロスターとの界面にこの詩が成立しようとするのであれば、17世紀末から現在までの時間を空間の同一性によって無化することが是非とも必要であるはずなのに、テキストは時間軸を取り扱う努力をしないのである。というのは、(2)として引用した「手紙 72」の冒頭と結びの間に挿まれているのは、「入会地」近くに住んだ入植者たちの名 (既出のデイヴィス、ヒルトン、エルウェルにベネットが加わっている) と住んだ位置のメモにすぎないからである。

→Bennett placed himself	
above 75'	10
Hilton above the trough between	
(on the edge of 75' too)	
→& Sam'l Davis on the height of	
the next rise, inside 125'	
(100' lying almost exactly the middle	15
of the 600 foot distance between his	
& Hilton's houses); and Joshua Elwell	
the other rise on the Commons Road,	
or "to the wood-lots" (1727),	
on the other	20
side of the 2nd trough, at	
125' Thus	

three 'hills' or hogbacks
 & two brooks
 characterize the upper
 road (as against the lower
 or dog Town road proper,
 where moraine, and the more (Ⅱ. 53. イタリックス筆者)

初期入植者たちの住居位置を「入会地」中心に辿るこの記述を根拠に、17世紀末から18世紀初頭にかけて、「エデン」のエクタイプでありえた彼らの「愛の庭」が、今も変わらぬ「愛の庭」としてこの「入会地」に息づいていると主張できるだろうか。眼前の「地獄」の光景は、「入会地」が「庭」であるという断言によって、「エデン」のエクタイプに転化しているだろうか。

このような問いをテキストはすり抜けようとする。「地獄」に見えるこの地の光景を低い場所の光景として描き、括弧でくくることによって (ll. 26–32)、括弧の外の高い場所にあるとする初期入植者たちの住居位置の記述と区別しようとするからである。この地は低く (the lower/or dog Town road proper, ll. 26–27) 初期入植者たちの住居位置は高い (above the trough, l. 11; on the height of/the next rise, ll. 13–14; the other rise, l. 18)。彼らは「上の道」(the upper road) の住人だったのである。括弧の中の低いところは「地獄」であり、括弧の外の高いところは「天国」に通じる「庭」なのだ。括弧の内と外との対立 (against, l. 26) は、低いところと高いところとの対立であり、かつ「地獄」と「天国へ通じる庭」との対立なのである。だから、眼前の「地獄」の光景は、「エデン」のエクタイプに転化する必要はない。「地獄」を低いところとして括弧の中に封じ込め、括弧の外の高いところに「エデン」を祖型にもつ「入会地」=「愛の庭」がある、とテキストは主張しているのだから。

しかし、ここには一種の詐術がある。というのは、括弧が分かつのは、低いところ（地獄）と高いところ（庭）であるように見えながら、実は現在と過去とを分けているからだ。括弧によって分かたれているのは、空間であるよりも、むしろ時間なのである。括弧が低いところにある「地獄」として封じ込めているのは、詩の語り手が目の当たりにしている現在なのであり、括弧の外の初期入植者たちの住居位置の記述は、作者オルソンがドキュメントから再現した過去の「庭」なのである。「手紙 72」で行われているのは、かくあったであろう過去のグロスターを彷彿させるエデン的「庭」によって、現在の「地獄」を囲い込む時間の操作に他ならない。橋によって開かれてしまったグロスターの内部に位置するドッグタウンの「始原」の「庭」であった現在の「入会地」には、是非、今も花が咲き乱れ、初期入植者たちの「愛の庭」と睦み合わなくてはならないのである。「入会地」は時間を無化しなければならないのだ。だからこそ、オルソンの妻エリザベスの「庭」がデイヴィスやヒルトンら初期入植者たちの「愛の庭」とあたかも同一の時空にあるかの如く描かれねばならなかったのである。

問題は、こうした時間と空間の操作によって眼前の「地獄」の現在が、「入会地」に息づく「始原」の「愛の庭」のヴィジョンの中に吸収されているか否かである。「帰るべき」(get back to) ところがここ「入会地」であるという「手紙 72」の主張が自らを支え

ているか否かである。

答は、否である他ない。過去のユートピアの中に現在を吸収しようとする「手紙 72」全体が、眼前の「地獄」からの逃走の詩学によって成立しているからだ。「帰るべき」ここ「入会地」は確かに、花と水を介して「エデン」のエクタイプたる過去の「愛の庭」と結びつこうとするが、眼前の「地獄」は「地獄」のままとどまりつづけるからである。ならば、ここ「入会地」に今も息づいているとされる「愛の庭」も、「地獄」の現在に背を向ける逃避空間としての影を帯びざるを得ない。時空の操作によって囲い込み駆逐しようとした「地獄」の現在が、「入会地」に息づく「愛の庭」という逃走の詩学を脅かすのである。その結果、最終的に「帰るべき」場所とされるこの「入会地」は不安定性を孕むことになる。

また、「帰るべき」ここ「入会地」のプロトタイプたる「愛の庭」に、初期入植者デイヴィスの妻の名「アン」とオルソン自身の妻の名「エリザベス」とがあたかも同一の資格を持つかの如く冠せられているために、「愛の庭」は「始原」を彷彿させるばかりでなく、自らの妻の「庭」が「始原」の「愛の庭」であって欲しいというオルソンの個人的願望をも満たす空間でなければならなくなる。「帰るべき」地点は、「愛の庭」が今も息づくここ「入会地」であったはずである。ところが、ここへの経路——それは過去から現在への経路でもある——の出発点に現在の「エリザベスの庭」が入り込んでいるために、経路が経路として機能しなくなっているのだ。オルソンがテキストにそっと滑り込ませた妻の名「エリザベス」は、テキスト内で既に複数の「帰るべき」地点を指し拡散しかけている矢印 \searrow に、テキストの外のオルソンの願望までもを指し示させるのである。その結果、「帰るべき」地点は、「手紙 72」が主張するテキスト内のここ「入会地」とテキストの外の「エリザベスの庭」とに分裂してしまう。方向を示すはずの矢印 \searrow は、方向性を失わざるを得ない。

そのうえ、「帰るべき」テキスト内のここ「入会地」も「地獄」の現在の脅威に背を向けた逃避空間にとどまり、「始原」の「愛の庭」の息づくところとして自らを定立するには至っていないために、方向性はテキスト内でも確固たるものにはなりえていないのだ。こうしたテキストの不安定性は、テキスト成立の論理と相容れぬオルソン自身の願望が、無媒介的にテキスト内に侵入することによって引き起こされているのである。

「手紙 72」は、作者の願望の不用意な介入によって、テキストがテキストの内と外との双方で方向性を失ない、解体の危機に曝されることを端的に示している。こうした方向性の喪失が『マクシマス詩篇』を永遠に未完に終わらせる要因にならずにはいないのである。『マクシマス詩篇』全体の足をすくいかねないこのような初歩的ミスは、何故オルソンは犯してしまうのだろうか。

第三の例が解答への手がかりを与えてくれる。

(3)

It is a testimonial, that they are still
or almost still, alive. They tie Gloucester
to her earliest life, or at least to that life since
just after 1700, when Banks fishing
was invented here. And the schooner,

in which they all, and this includes
Carl Olsen and Archie McCleod
learned their
trade.

It is a pleasure to report,
to a city which is now so moribund,
that there are men still,
in some of these houses, of evenings,
who are of this make.

(The Death of Carl Olsen, 現行版475-476. イタリックス筆者)

「カール・オールセンの死」は、現在のグロスターを「始原」のグロスターにつなぎうる二人の船長、カール・オールセンとアーチャー・マクロードを讃える詩である。とりわけ、オルソンに畏敬の念を抱かせていたカール・オールセンは『マクシマス詩篇』にたびたび登場する人物である。彼は、1903年17歳の頃ノルウェーからグロスターに移住し、二度の海難に遭って大怪我をした後も、79歳で他界する数年前まで漁業に従事した「鉄の男」であった（現行版474-475頁）。没年は1965年。オルソンがこの詩を書いた年である。詩は、このオールセンの死を悼みつつ、彼と並ぶ評判のアーチャー・マクロードと彼との二人をグロスターをグロスターたらしめた人物として讃える。今はなき「始原」のグロスターが、こうした人物によって確かに偲ばれる、とこの詩は言う。カール・オールセンへのエレジーは、消えゆく「花の都市」への挽歌なのである。

ここで注目すべきは“report”の一語である。「始原」のグロスターを諸事実の集積によって浮かび上がらせようとするオルソンは、過去の出来事を「報告する」(report) ツキエジデスではなく、自ら資料を収集し、「歴史」を「物語る」(tell) ヘロドトスを範としていたはずであった。然るにこの詩は、カール・オールセンの同名の息子カールが語った父の思い出をオルソンが「報告する」詩であり、「報告する」ことを喜びであると言うのである。

This is a way his only son, also Carl,
spoke yesterday, when for the first time
I learned
Carl Olsen
had died.

(現行版. 475)

「鉄の男」カール・オールセンにオルソン自身が会ったことがあり、実の息子が父カールのことを語っているのだから、カール・オールセンがどのような人物であったのかを「報告する」ことは、「物語る」として実質的に同じかもしれない。この引用に先行する部分、即ち息子の語る父カール・オールセンの思い出を記した部分とオルソン自身のカール・オールセン体験とを過去の出来事の資料と見なし、引用に後続する箇所をオルソンの「報

告」ととれば、「報告する」とことと「物語る」とこととの差はないと考えられるからだ。

そして、「報告すること」=「物語ること」となるこの時は、詩の語り手マクシマスと作者オルソンとの距離がゼロになる時でもある。すぐ上の引用につづく“Charles Olson, Friday, November 5th, 19—/65.”という報告者名と日付は、マクシマス＝オルソンをはっきりと示すのである。しかし、「物語ること」と「報告すること」との区別が無くなり、語り手マクシマスと作者オルソンとの境が無くなるこの地点は、『マクシマス詩篇』を根底から揺り動かし、テキストを解体させる暗黒点ではないのか³⁹⁾。マクシマスなるグロスターの精霊が、グロスターの「始原」を過去の諸事実の集積と神話との界面に浮かび上がらせることこそ『マクシマス詩篇』のもつ方向性だったはずであり、「始原」を再構成する過去の諸事実は、「報告」されるのではなく「物語」られねばならなかったはずだからである。否、「始原」は語られるだけではなく、生きられねばならなかったはずなのだ。だからこそマクシマスは自らの身体を押し抜け、グロスターと同じ大きさを持つ精霊として措定されたのではなかったか。然るに、「カール・オールセンの死」は、マクシマスがオルソンに他ならぬことを余りにもあからさまに示しているのである。だから、「カール・オールセンの死」は、「始原」のグロスターを偲ぶよすがとなる人物の不屈の生涯を極めて感動的に謳いあげるかに見えながら、その実、『マクシマス詩篇』に対する作者オルソンの根本的な裏切りを暴露している詩なのである。

だがまた、同じ「カール・オールセンの死」は、『マクシマス詩篇』の作者オルソンにとって至福の瞬間を定着し得た幸福極まりない詩でもありうる。なぜなら、この詩においてオルソンの全身が精霊マクシマスに満たされ、オルソンその人が精霊マクシマスに変容し、「物語ること」と「報告すること」との区別などは不要になる境位にオルソンが達しているとも考えられるからである。そうであって初めて、「報告すること」がただちに「私」オルソン＝マクシマスの「喜び」であると言えたはずなのだから。

問題は、語り手マクシマスと作者オルソンとの関係が最後の最後まではっきりとしない点にある。「カール・オールセンの死」が、作者の語り手に対する裏切りとテキストに対する犯罪の証左であるのか、それとも、語り手である精霊マクシマスに作者が一部の間もなく同化し得た幸福極まりない瞬間を示すものであるのか、判断する手がかりが読者には与えられていないのである。『マクシマス詩篇』が最終的に未完であらざるを得ない根本的原因は、テキストを構成する一篇一篇の詩中の「私」が、オルソンの定立しようとする語り手マクシマスなのか、作者オルソンでしかないのか、最後まで結着がつかないことなのである。すなわち、『マクシマス詩篇』を解体させる最大の宿敵は、テキスト内に潜み、自らが自ら以外の何者でもないと主張する作者の『チャールズ・オルソン詩篇』なのだ⁴⁰⁾。いや、むしろわれわれはこう考えるべきかもしれない。『マクシマス詩篇』とは、精霊マクシマスと作者オルソンとが語り手の座を賭けて攻めぎ合う闘争の場なのだ、と。ならば、オルソン＝マクシマスを示す「カール・オールセンの死」は、この闘争が終結する地点を指すのであるから、幸福な和解の詩であってよいはずだ。しかし、ここで精霊マクシマスに対して作者オルソンが圧倒的な勝利を収めていることは、一転して『マクシマス詩篇』の解体を意味してしまうのである。勝利を収めるのは、無論、マクシマスでなければならない。

「手紙 7」を思い起こそう。そこでは船大工ウィリアム・スティーヴンズが「最初の

マクシマス」とされていた (The carpenter is much on my mind/I think he was the first Maximus, I. 31)⁴¹⁾。その根拠は、グロスターを漁港都市にするために不可欠な船を造ることによって、グロスターの「始原」作りに参画したばかりでなく、彼が「始原」の記録に寄付した人物だったからである。後に彼は、自らの名で歌い出される詩 (Ⅲ. 28-29) と自らの名を冠せられた詩「スティーヴンズの歌」(Stevens Song III. 30-34) で更にその生涯を詳しく記述される。前者は彼を船大工の元型として描き (he ventured/on to the sea in the trunk of a tree⁴²⁾)、かつ「海の王者」として彼を称える。スティーヴンズの造った船を見たスペイン王は、彼に海軍を与えてイギリスを撃破したがった (Ⅲ. 29) 程であった、と。このスティーヴンズがグロスターの「始原」作りに参画したことを詩は、「歴史のこちら側にトロイを建設した」(Ⅲ. 29) としている。つまり前者は、イギリスから渡って来た船大工スティーヴンズの卓抜な造船技術を絶讃し、彼を「都市」建設の英雄として称揚するのである。

後者「スティーヴンズの歌」は、彼のもう一つの英雄的側面に光を当てる。それは、どんな悲惨な事態に陥ろうとも決して自らの意志を曲げぬ堅忍不拔の人としてのスティーヴンズ像である。彼は、植民地であったグロスターの権利を制限しようとする時の英国王チャールズⅡ世を痛罵した廉で裁判にかけられ、一か月間の投獄、罰金、公民権の剝奪を宣告されたにもかかわらず、最後までチャールズⅡ世に恭順の意を示さず、貧窮していったのであった⁴³⁾。勝ち目のあるなしにかかわらず、圧倒的な権力の弾圧に最後の最後まで抵抗する英雄的側面ゆえに、スティーヴンズは一層「最初のマクシマス」に適わしい。なぜなら、『マクシマス詩篇』は、既にアメリカの一部となったグロスターをあくまでもアメリカの外部にある「元型都市」とするために、時間を前向きに遡り、その果てに未だ空白としてしか描き得ぬ「始原」のグロスターを望みせしめようとする詩篇であったからだ。「大」を頑ななまでに退け、「小」に与し続けることによって「大」を質的に超越し、ついには「大」に対する「小」の優位を確立しようとする徹底的な反逆の詩篇が『マクシマス詩篇』なのだ。

権力者の横暴に対して最後まで屈服しなかった点で、オルソンの父はスティーヴンズと結びつく⁴⁴⁾。休暇願いの受理をめぐる些事に端を発した上司との確執によって、精神的肉体的苦痛を伴う部所への配置換えをはじめとする幾多の辛酸をなめさせられつつも、上からの弾圧に最後まで抵抗しつづけ、死んだ郵便配達夫が、オルソンの父であった⁴⁵⁾。だからわれわれは、英雄的な反逆の魂の住み家が、マクシマス→スティーヴンズ→オルソンの父、の体内であったと考えることができる。

スティーヴンズを介してオルソンの父をマクシマスに結びつけるのは、反逆の魂ばかりではない。オルソンの父もマクシマス同様、アメリカの「始原」に強い関心を持っていた⁴⁶⁾。上司との不和を顕在化させ決定的にしたのは、プリマス三百年祭参加のための休暇願いが旅立ちの直前に却下されたにも拘らず、オルソンの父が少年オルソンを伴ってプリマス行きを決行した一件だったのである⁴⁷⁾。この件で争って破れたオルソンの父は、アメリカの「自由」への感傷的な思い込みから醒め、以後、過去への関心をグロスターと漁業に限定していった⁴⁸⁾。こう見てくると、オルソンの父もスティーヴンズ同様、マクシマスたる資格を持ちそうに見える。だから「スティーヴンズの歌」で、イギリスから逃れ、グロスターへ渡って来たスティーヴンズとグロスターにとどまったオルソンの父とが並べ

られても不思議はないのである (Stevens ran off/My father//stayed/& was ground down//to death, III. 31)⁴⁹⁾。

精霊マクシマスが、スティーヴンズ→オルソンの父→オルソン、に宿ったのだとすれば、オルソンの父は「第二のマクシマス」、オルソンは「第三のマクシマス」であることになるから、オルソンはオルソンであるままマクシマスたり得ることになる。そうであるなら、語り手マクシマスと作者オルソンとの間に不和などあり得ぬはずだ。しかし、そうではないのだ。語り手と作者の幸福な関係を「スティーヴンズの歌」は、きっぱりと否定する。

「スティーヴンズの歌」は、「父」から出て、「父」を喰らう得体の知れぬモノに初めから憑かれている。

out of the fire out of the mouth
of his Father
eating him (III. 30. Stevens Song 冒頭)

「父」を喰らうモノは、詩中で息子あるいは娘の体内に忍び込む「狼」あるいは「犬」とされる「創造の原理」(a principle/in creation, III. 31)である。この「狼/犬」は、外側から知らぬ間に身体の内深くへ入り込み、「父」であろうと「母」であろうと噛み殺させる「クンクン鼻を鳴らす汚れた不潔な窮極の力」(the dirty filthy whining ultimate thing, III. 33)なのである。「私」の中に入り込んだ「犬/狼」、即ち「犬/狼」となった「私」は、郵便配達夫である「父」の肉を裂き、骨を砕く (the demon/the canine//head piercing/right through the letter carrier//trousers and into the/bone, III. 33)。

オルソンにとって父が「大」なるものなら、詩中で「犬/狼」と化して「父」を倒すことはオルソンのマクシマス性を示すことになるだろう。しかし、オルソンの父は、「大」である権力と戦って破れた「小」なのだから、オルソンが「犬/狼」となって「父」を噛み殺すことは、「大」なる権力に加担し、「小」なる父を代行殺害することにしかならず、オルソンのマクシマス性を証することにはならない。むしろオルソンは、詩中に登場する北欧伝説の軍神 Tyr の如く、「犬/狼」の暗い親殺し衝動を鎮めるために、噛みちぎられることをも辞さずに自らの手を「犬/狼」の口中に差し入れる者でなければならない。⁵⁰⁾ そうであってこそ、より高次の「父」超克が可能になるはずなのだ。詩の結びは、「犬/狼」と化して行う「父」殺しが「私」オルソンをマクシマスから引き離す行為であることをはっきりと示している。

Stevens
went away across Cut Bridge

my father
lost his

life the son
of the King of the Sea walked

away from the filthy wolf
eating the dropped body, the
scavenger

(Ⅲ. 34)

「海の王」の息子スティーヴンズは、「父」の遺棄された屍を喰らう「私」＝「犬/狼」＝「道路清掃夫」から去って行く。「犬/狼」たる「私」オルソンの「父」殺しと「父」食いは、「私」を「第三のマクシマス」にはしないのである。

精霊マクシマスが、スティーヴンズ→オルソンの父→オルソン、に宿ったという仮説は、こうして否定される。したがって、オルソンはオルソンであるままマクシマスたることはできないのである。それに、オルソンの父を「第二のマクシマス」と考えるとところに既に無理があった。オルソンの父は、確かにグロスターの「始原」に興味を示したかもしれないが、彼は「始原」作りに参画した訳でもないし、「始原」の記録に貢献した訳でもない。彼の英雄的反逆も、ついに「大」を超越するところまでは行かず、ただただ「大」なる権力の圧力に耐えたばかりのことであった。彼をマクシマスであり得なくする最も致命的な点は、マクシマスであるためには何らかの形で「手紙」を発信しなければならないのに、彼が他人の手紙を運ぶ郵便配達夫であったことである。彼が一生を賭して発信した唯一の「手紙」は、息子オルソン宛ての「始原」への興味と「大」なるものに対する頑なな抵抗とを内容とする形の無い「手紙」だった。このような父を息子オルソンが詩中で「犬/狼」となって食い殺したところで何になろう。息子オルソンの象徴的「父」食いに意味があるとするれば、「父」を喰らうことによって、父にあったわずかなマクシマス性を自らの体内に摂取することであろう。しかし、「父」食いによるマクシマス性摂取に成功したのなら、「私」＝「犬/狼」＝オルソンは、「最初のマクシマス」スティーヴンズに見捨てられることはなかったはずなのだ。「息子」オルソンが喰らうべき「父」は、マクシマス性をわずかに持つ失意の郵便配達夫よりも遙かに大いなる「父」でなければならない。

「息子」オルソンが喰らうべき大いなる「父」とは何か。それは、「始原」のグロスターから離れ、墮落した「父」なるアメリカをおいて他にない。「父」なるイギリスから出た「息子」スティーヴンズが「始原」のグロスター建設によって「父」イギリスを食ったように、アメリカの「息子」オルソンは、「始原」のグロスターたる「花の都市」のヴィジョンを確立することによって、「父」アメリカを超越し、そのヴィジョンの中に「父」アメリカを包摂しなければならないのだ。この時はじめて、「息子」オルソンの「父」食いは完成するはずなのである。

「息子」の「父」食いは、マクシマスとオルソンとの関係にも及ばなければならない。作者オルソンが生んだ「息子」マクシマスは、「父」オルソンを喰らい、自らの体内に吸収し尽さなければならないのだ。なぜなら、この時こそ『マクシマス詩篇』が『チャールズ・オルソン詩篇』を包摂し、自らの存在を確立しうる時なのだから。

「手紙 7」、スティーヴンズの名で歌い出される詩、及び「スティーヴンズの歌」は、作者オルソンに対する詩り手マクシマスの紛うかたなき優位を明示することによって、未完の『マクシマス詩篇』がどの時点で完成するのかを指し示しているのである。だが、スティーヴンズ詩群によって示された『マクシマス詩篇』の完成時点を、われわれは更に問

わねばならない。未完の詩篇が完成し、作者が語り手のベルソナになる時点とは、一体どのような時点なのか、と。そうすることによって、われわれが発した最初の問い——「テキストを引き裂いた犯人は誰か」⁵¹⁾——に照明が与えられるであろうから。

VII. 「手紙」を運ぶオルソン

『マクシマス詩篇』が未完から完成に転換する時点とは、無論、マクシマスが「始原」のグロスターを描き得た時点である。そして、「始原」を描きうるマクシマスとは、作者オルソンを自らの体内に吸収し尽した語り手に他ならない。しかし、そのような語り手はテキスト内には存在しなかった。語り手マクシマスは、「名」としてテキスト内に存在したにすぎず、その「実体」はマクシマスたらんとし果たせぬ作者オルソン以外の何者でもなかったのである。ならば、われわれが最後に問うべきは、オルソンがマクシマスたりうるのはいつか、でなければならない。

オルソンがマクシマスたり得るのは、グロスターの「始原」である「花の都市」のヴィジョンを描き得た時点である。未だ「空白」としてしか描き得ていない「始原」の像を浮かび上がらせるためには、オルソンは自らを超えた者にならなければならない。イギリスから西に向かって船出し、アン岬に着いたグロスターへの初期入植者たちの意識を、オルソンは是非自らの意識としなければならないのである。それに気付かぬオルソンではなかったことを「手紙 27」は、はっきりと示している。

Maximus to Gloucester, Letter 27 [withheld]

the generation of those facts
which are my words, it is coming

from all that I no longer am, yet am,
the slow westward motion of

more than I am

(II. 14)

過去から現在に至るすべてのグロスターの民の意識が、オルソンの内に包摂されていたなら、オルソンの内なる「始原」の人々はオルソンに「始原」を描かせ、描かれた「始原」の中で躍動したにちがいない。そうであったなら、作者オルソンは語り手マクシマスであり得たはずだ。しかし、オルソンは他者の意識をわがものとすることによってマクシマスとなる方法をとらなかった。

オルソンが「始原」の「花の都市」を描くために用いたのは、「始原」に関する諸事実の集積によって「始原」を再構成する方法と、神話的・元型的に「始原」を定位する方法との界面に「花の都市」を浮かび上がらせようとする方法であった。この「界面」に「始原」の「花の都市」が浮かび上がれば、そこにこそマクシマスは立ち現われるはずだった。しかし、希求されるこの「界面」は、ついにテキスト内に存在しえなかったのである。「界面」の不在は、諸事実の集積による「始原」構成と神話的・元型的な「始原」定位とを融

和しえぬまま二極に分化させ、テキストを二つに引き裂くばかりでなく、この二方法によって「始原」を描こうとする主体、即ち『マクシマス詩篇』の書き手オルソンを二つに引き裂く。「手紙」を運ぶオルソンと、「手紙」を書くオルソンとに。

「始原」に関する諸事実なるものは、グロスター建設に携わった人々の残した記録とグロスター関係の歴史書からの転写によって得られたものであった。これらのドキュメントから「始原」を再構成するためには、オルソンは「物語る」歴史家ヘロドトスに倣って、ドキュメントを素材に自ら「始原」を物語るべきであった。出来事を「報告する」ツキュジデスに倣うべきではなかったのだ。然るにオルソンはツキュジデスの未裔ですらない。というのは、オルソンの「始原」構成が他人の「報告」を転写することによってなされているからだ。他人が別の他人に向けて書いた「報告」を転写によってテキスト内へ運び込み、それをグロスターの人々に向けて自分が発信した「手紙」と化す方法は、オルソンをマクシマスにはせず、「報告」という他人の「手紙」をテキスト内に運ぶ「郵便配達夫」にしかたけであった。しかも、この方法によって運ばれた膨大な量の「手紙」は、結局「始原」が「空白」であるというたった一通の「手紙」に還元できる底のものなのだ。オルソンの運んだ「始原」を構成するはずの「手紙」は、運ばれれば運ばれるほど「始原」の「空白」を暴き、叙事詩人たらしとする配達人オルソンの意図を裏切る。「手紙」は、オルソンによって運ばれるよりもむしろ、運び手オルソンを運ぶのだ。こうして、「手紙」を運ぶオルソンは、「手紙」に運ばれるオルソンに転落し、オルソンの主体は自己喪失の危機に見舞われる。

もう一人のオルソン、神話的・元型的にグロスターの「始原」を定位しようとする抒情詩人オルソンは、「手紙」を運ぶオルソンではない。時として、グロスターがグロスターである必要がなくなるほど神話的・元型的な詩を書いてしまうことがあろうとも、また、北欧神話やインディアン伝説、あるいは他人の哲学体系などに依拠することが多くとも、抒情詩人オルソンは「手紙」を書くオルソンなのである。

far far out into Eternity Enyalion,
the law of possibility, Enyalion
the beautiful one. . . .
Enyalion
is the god of war the color
of the god of war is beauty...
but the city
is only the beginning of the earth the earth
is the world brown-red is the color of mud,
the earth
shines

(Ⅲ. 38-40)

“Enyalion” は、幾つかの神話の軍神をオルソンが融合させて誕生させた戦の神であるが、⁵²⁾「大地」を輝かせる原理として詩中で確たる存在となっている。テキスト内で生成されるこうした抒情空間にこそ、グロスターの「始原」は立ち現われるはずなのである。しかし、

この種の神話的・元型的抒情空間を幾ら描いてみたところで、そこに「始原」に関する諸事実が吸収されぬ以上、「界面」は存在しようもない。グロスターに流れる「時間」を神話的・元型的に封じ込めようとする次の詩

the sky,
of Gloucester
perfect bowl
of land and sea

(Ⅲ. 57)

も、永遠なる空間を感じさせることはできても、やはり「始原」を定位することはできないし、グロスターの「現在」を記述することにもならないのである。自らが詩中で述べるように、オルソンは「抽象」としてしか描けていない「空白の始原」に「形」を与えなければならないのだ。



Charles Olson as an infant in his father's mail sack. See *Maximus* III, 21. Photo courtesy Mrs. Mary Sullivan of Worcester, Mass.

George F. Butterick, *A Guide to the Maximus Poems of Charles Olson* 序文中の写真より。

to revive the Abstract to make it
possible for form
to be sought again. Each year form has
expressed itself. Each year it too
must be re-sought. (The Ocean, III. 90)

それができないならば、オルソンは「父」アメリカを喰らうどころか、他人の「手紙」に運ばれる挫折した詩人として、郵便配達夫であった父の郵便カバンに逆戻りする他ないだろう（写真参照）。鏡に映った自らの姿を見てぼそりとつぶやいた詩の恐ろしい予言どおりに。

The Return to Mail-Bag, or,
The Postal Union
of the Son with the Father

A View, the Mirror, of Myself,
Age 52 (Ⅲ. 21)

そうならないための出口は一つしかない。諸事実の集積によって「空白の始原」を描こうとする叙事詩人オルソン＝「手紙」を運ぶオルソンと、無時間の中で「始原」を定位しようとする神話的・元型的抒情詩人オルソン

＝「手紙」を書くオルソンとが、どこかで一人のマクシマスになることだ。それは「手紙」を書くオルソンが「手紙」を運ぶオルソン（「手紙」に運ばれるオルソン）を吸収し尽す地点で起こることであり、この地点で初めて希求された「界面」が立ち現われ、「始原」の「花の都市」が読者の前に姿を現わすであろう。この時こそオルソンは『チャールズ・オルソン詩篇』の書き手である自ら、テキストを引き裂く犯人であった自らを超えて、『マクシマス詩篇』の語り手マクシマスたり得るであろう。

しかし、そのような時を引き寄せるためには、叙事詩人たらしとするオルソンは、他人の「手紙」を運ぶ方法では「始原」を「空白」としてしか描き得ぬことを悟らねばならないだろうし、また抒情詩人である「手紙」を書くオルソンも、既にアメリカの一部と化したグロスターの「現在」に背を向けてひたすら無時間の中で神話と元型を夢見することを止めなければならないだろう。「手紙」を運ぶオルソンも「手紙」を書くオルソンも、共に「現在」を見まいとする脆弱な叙事詩人であり抒情詩人であるにすぎないのである。「新たな中心」(a new center, III. 176)を求めて、ここグロスターへやって来た初期入植者たちの果敢極まりない前進する魂

that the Mind or Will always

successfully opposes & invades the Previous, This
is the rose is the rose is the rose of the World

(Migration in fact で始まる詩. III. 176)

を二人のオルソンはわがものとし、「現在」の中にこそ「未来」を見るべきなのである。

the initiation

of another kind of nation

(III. 228)

そうであってこそ、『マクシマス詩篇』の作者は、墮落した現在のグロスターの中に「隠れた都市」(hidden/city, LETTER 2. I. 5)を見得る遙かに逞しい本物の詩人に生まれ変わることができるだろう。オルソンがグロスターの精霊マクシマスたり得るためには、何よりもグロスターの「現在」を生きねばならなかったのだ。とりわけ、詩人としての書くことエクリチュールの地獄を。

Maximus of Gloucester

Only my written word

I've sacrificed every thing, including sex and woman
—or lost them—to this attempt to acquire *complete*
concentration.

Half Moon beach ("the arms of her")
my balls rich as Buddha's

sitting in her like the Padma
—and Gloucester, foreshortened
in front of me. It is not I,
even if the life appeared
biographical. The only interesting thing
is if one can be
an image
of man, “The nobleness, and the arete.”

(Later: myself (like my father, in the picture) a shadow
on the rock.

Friday November 5th

1965

(Ⅲ. 101. イタリアックス筆者)

「手紙」を運ぶオルソンと「手紙」を書くオルソンの二人が「完全な集中」によって、仏陀に並び、かつギリシャの徳性をも具えたマクシマスになり得るか、それとも、父同様「岩にうつる影」としてのほかない存在に終わるかは、「始原」からの「手紙」を運ぶ自らでも、永遠に向けて「手紙」を書く自らでもない新たな主体をオルソンが構成しうるか否かにかかっていたのである。新たな主体とは、自らの「生きている手」が現在の中から何を掴みうるかに集中し、エクリチュールの地獄を生き抜く「私」に他ならない。

*This living hand, now warm, now capable
of earnest grasping...*

(Ⅲ. 177. イタリアックス筆者)

しかし、過去からの他人の「手紙」を運ぶことも、永遠に向けて「手紙」を書くことも止めた「私」を、エクリチュールの地獄は、ほとんど狂気と見分けがつかぬ程の無方向性のただ中に突き落とす。

On my back the
Harbor and over it the long arm'd shield of Eastern
point. *Wherever I turn or look in whatever direction,
and near me, on any quarter, all possible combinations of
Creation even now early year Mars blowing
crazy lights at night and as I write in the day light snow
covering the water and crossing the air between me and
the City. Love the World—and stay inside it.*
Concentrate
one's own form, holding
every automorphism

2 Feb. 1968 (Ⅲ. 188. イタリアックス筆者)

「私」が突き落されたエクリチュールの地獄とは、事物のあらゆる結合可能性が現前するために、どの可能性をも採ることができず、従って、どの地点へ向けて詩を収斂させてゆくことも許されぬ、あまりにも開かれた「現在」の無方向性の謂なのである。書くことを不可能にする程、可能性が充満した無方向性の地獄の中で、ひたすらな「集中」によって物が形を成すのを待つ「私」、狂気の光に曝されつつ「世界を愛せ、そしてその中にとどまれ」と自らに命ずる「私」は、この先どんな「世界」をわれわれの前に開示してくれるのだろうか。しかし、唯一人、自らの「現在」に向けて「手紙」を書くこの「私」は、詩人としての豊かな可能性を孕みながらも、グロスターの「現在」のただ中から「花の都市」を呼び起こすには至らず、あまりにも開かれた「現在」の無方向性の地獄であえぐにとどまるのである。⁵³⁾ あらゆる方向への「集中」は原理的に不可能なのだから。

そして、この長大な『マクシマス詩篇』は、オルソンの妻が自動車事故で死んだことを知らぬ者には、全く意味不明の一行詩で突然閉じられる。何らの方向性も持たぬまま。

my wife my car my color and myself

(Ⅲ. 229)

その結果、「始原」の「花の都市」は「空白」のまま残され、マクシマスも名のみを持つばかりでついにわれわれの前にその姿を充分には現わさない。テキスト内の実体として存在するのは、「手紙」を運ぶオルソンと、永遠に向けて「手紙」を書くオルソンと、書くことの地獄に佇む「私」オルソンとの三人のオルソンなのである。

一体、いつのことなのか。「手紙」を書くオルソンが「手紙」を運ぶオルソンを吸収して一人のマクシマスになるのは。グロスターの「始原」の「花の都市」がわれわれの前に姿を現わすのは。この問いに答えうるのは、おそらくわれわれが最後に見たエクリチュールの狂気に曝されている「私」であろう。しかし、彼の狂気が無方向の狂気であってみれば、方向性を持つわれわれの問いに彼は決して答えてはくれないだろう。彼が答えるともなく何事かをつぶやくとすれば、それは、「開かれている」ということばであるに違いない。そして、『マクシマス詩篇』とは何か、という問いに対しては、「手紙」という語に各々の思いを込めながらも三人のオルソンは口をそろえてこう答えるに違いない。「それが、われわれの運んだ『手紙』なのです」と。テキストの内と外との双方で既に手紙の原義から遙かにへだたった彼等の「手紙」⁵⁴⁾の全体が、不在の『手紙』を形成し、その不在の『手紙』の中に「元型都市」を核にもつ「始原」の「花の都市」が確かな実体となって現われでもするかのように。

テキストを引き裂いた真犯人は、一体誰であったのか。犯人オルソンの犯行の足取りは辿れたが、犯人に犯行を犯させた真犯人の行方は杳として知れない。事件は、作者と語り手とエクリチュールの主体とその方法との形づくる迷宮に入ったまま今日に至る。

注

*本稿は「『手紙』を運ぶオルソン——Charles Olson, *The Maximus Poems* 試論——」(上)、『梶山女学園大学研究論集』第21号第1部, 1990年, pp. 39–60所収)の続編である。前号同様, 1989年6月17日名古屋大学で開かれた日本アメリカ文学会中部支部6月例会で行った同タイトルの口頭発表に加筆修正したものである。テキストは, Charles Olson, *The Maximus Poems* ed. by George F. Butterick (Berkeley: University of California Press, 1983)を用いる。

- 1) George F. Butterick, *A Guide to The Maximus Poems of Charles Olson* (Berkeley: University of California Press, 1980) p. 233は, この二つの意見が共に歴史家 Thomas Babson の“Evolution of Cape Ann Roads”中の“But today’s big story for the Cape is that it has at last been joined to the continent by Route #128. The great hope is that it will help to bring in new industry to supplement the fisheries.”という考えへの反発と見なしうることを教える。
- 2) 1964年8月2日 *New Writing in the U. S. A.* への注としてオルソンは, “Maximus, Hero, a metal hot from boiling water, born in the winter, 1949–50, age 38–39”と書いている。拙論「『手紙』を運ぶオルソン——Charles Olson, *The Maximus Poems* 試論——」(上)『梶山女学園大学研究論集』第21号第1部, 1990年, p. 40参照。
- 3) Butterick, 5.
- 4) Butterick, 217.
- 5) 拙論「『手紙』を運ぶオルソン——Charles Olson, *The Maximus Poems* 試論——」(上)『梶山女学園大学研究論集』第21号第1部, 1990年, p. 42参照。
- 6) 同上, p. 58参照。
- 7) Butterick, 729–730.
- 8) Butterick, 729.
- 9) Butterick, 728–730.
- 10) オルソンが1968年1月11日 *the Gloucester Times* の編集者に送った手紙にこういう一節がある。“Is there no sense in the City that her beauty, by nature, and the support of man, is not to be slashed and gone for ever simply to accommodate business men, who are no matter how progressive and that virtue, also profit-makers and so immediately or eventually greedy. And devouring. I BEG AGAIN for action.” Butterick, 729.
- 11) 「根の都市」については, 拙論「『手紙』を運ぶオルソン——Charles Olson, *The Maximus Poems* 試論——」(上)第Ⅲ章ii節「不/在の都市」『梶山女学園大学研究論集』第20号第1部, 1990年, pp. 51–54参照。
- 12) December 18th (Ⅲ. 202–204)の後に“flower of the underworld” (Ⅲ. 194)がつづくという記述は奇妙に思われるであろうが, 現行版テキストの頁では, December 18th (597–599)の後に“flower of the underworld” (600)が続くのである。
- 13) 無論, テーベが「地下の花」だということではない。Amphion の堅琴は, 空中・地上・地下世界を各々司る神々を讃えるために三本の弦を有し, その音楽はテーベ建設の宇宙的神話的支えであった。しかし, 地下にあったテーベが Amphion の奏する音楽によって地上に出現したわけではない。Robert Graves, *The Greek Myths: 1* (Harmondsworth: Penguin Books, 1955) 256–258参照。
- 14) 拙論「『手紙』を運ぶオルソン——Charles Olson, *The Maximus Poems* 試論——」(上)『梶山女学園大学研究論集』第21号第1部, 1990年, pp. 52–53参照。
- 15) Butterick, 702.

- 16) Butterick, 512.
- 17) C. G. Jung と Richard Wilhelm の共著 *Das Geheimnis der goldenen Blüte, ein chinesisches Lebensbuch* (1929)。その英訳は *The Secret of the Golden Flower*, trans. Cary F. Baynes (Princeton, New Jersey, 1967), 邦訳は湯浅泰雄・定方昭夫訳『黄金の華の秘密』(東京: 人文書院, 1980年)。中国学者 R. Wilhelm による『太乙金華宗旨』翻訳及び解説に Jung が更に深層心理学の立場から解釈を加えた書物。邦訳版解説によれば、書名『黄金の華の秘密』は『太乙金華宗旨』の訳語であり、「太乙」は神名。「太乙」は古くは「太一」「泰一」と記され、陰陽二神が分かれてくる根源の神。道教の基本理念である「道」Tao は、太乙神の哲学的表現であり、「金華」は、瞑想の中からひらけてくる黄金の華である (p. 312)。『太乙金華宗旨』は唐代の道教の祖師呂巖の教えをまとめたものといわれる (p. 313)。
- 18) Butterick, 512より。邦訳『黄金の華の秘密』p. 147及び p. 149参照。
- 19) 『太乙金華宗旨』第六章、回光徴驗、2節～4節にこうある。
 2 静中に^{めいめん}昧昧として^{たいいつ}間無く、^{しんじやう}神情、悦豫なること、酔へるが如く浴するが如し。此れ体にあま遍ねく陽和なりと為す。金華^{たちま}乍ち吐ぶるなり。
 静けさの中で、とどれることもなくつながった感じで、心の動きと気分が昂揚して、酔ったような、湯を浴びたような、喜びある感じになることがある。これは、陽の気が〔春の大地のように〕全身をめぐって調和しているしるしである。このとき、「黄金の華はたちまち^{つばみ}蓄が芽生える^{らい}」のである。
 3 既にして万籟、俱に寂として、皓月天に中し、大地は俱に是れ光明の境界なりと覚ゆ。此れ、心の体、開明すと為す。金華正に^{ひら}放くなり。
 やがて一切の音が消えて静寂になり、白く輝く月が中天にかかり、この大地は〔すみ切った空の月とともに〕明るい光にみちみちた世界のように感じられてくる。そのときは、心の本体がはっきりと明らかになってきたしるしである。これは「黄金の華がたちまちひらく」という体験である。
 4 既にして、遍体充実し、風霜を畏れず。人、之に当りて興味索然たるべきも、我、之に遇へば精神更に^{さかん}旺なり。黄金は屋を起し、白玉は台を為る。世間の腐朽する物も、我れ、真炁を以て之を呵し、生を立つ。紅血は乳となり、七尺の肉団、金宝に非ざるは無し。此れ則ち、金華大いに凝れるなり。
 やがて〔さらに修行をつんでゆけば〕全身が力にみちあふれたようになり、冷たい風や霜にあたっても平気だというような感じになる。他の人たちなら何の興味もないような事柄に出会っても、自分にはますます精神力が充実してくるのが感じられる。それはあたかも、黄金で家を建て、白い宝石で土台をつくるようなものである。この世の腐り果てたようなものであっても、真の気のエネルギーをそれに吹きかけて、ただちに生き生きとよみがえらせることができる。赤い血は甘美な乳に変わり、七尺の肉のかたまりである自分の身体は、ほんものの黄金の宝になってしまう。このような体験が、「黄金の大なる結晶」のしるしなのである。邦訳『黄金の華の秘密』pp. 201-202より。
- 20) Butterick, 160-161, 172-174.
- 21) Butterick, 142-143, 167-169を「手紙 23」と併せて参照。
- 22) オルソンが依拠した他の代表的な書物は、John Winthrop, *The History of New England from 1630 to 1644* (1853), J. W. Thornton, *The Landing at Cape Ann: or the Character of the First Permanent Colony on the Territory of the Massachusetts Company* (1854), B. Adams, *Emancipation of Massachusetts* (1887), J. R. Pringle, *History of the Town and City of Gloucester, Cape Ann, Massachusetts* (1892), C. E. Mann, *In the Heart of Cape Ann, or the Story of Dogtown* (1906), C. E. Levermore, *Forerunners and Competitors of the Pilgrims and Puritans* (1912), J. B. Connolly, *The*

Book of the Gloucester Fishermen (1928), W. B. Rich, *Fishing Grounds of the Gulf of Maine* (1929), S. E. Morison, *Builders of the Bay Colony* (1930), J. B. Brebner, *The Explorers of North America 1492–1866* (1933) であった。書物だけではなく、the *Gloucester Times* や the *Boston Post* などの新聞及び各種雑誌、それに市の文書などにオルソンは資料を求めた。

- 23) Butterick, 147.
- 24) この点に関して Hallberg は言う。“Olson’s best poetry is offered as explanation and understanding, not as expression.” (p. 3), “He [Olson] actually expected his readers not just to be impressed with his learning, as many are, but to go to the library and read the books.” (p. 23), “Olson... attempts to understand the ideas behind historical events” (pp. 102–103). Robert von Hallberg, *Charles Olson: The Scholar’s Art* (Cambridge, Massachusetts: Harvard U. P., 1978).
- 25) Ⅲ. 175/現行版558とⅢ. 176/現行版565の間に“The hour of evening...”で始まる詩が6頁はさまれている。
- 26) “eternal event”とは Alfred North Whitehead (1861–1947) の *Process and Reality* (1929) 中の用語“eternal objects”および“events”を指し、“eternal object”は純粋な潜勢力であって特定の実在物が特定の実在物になる力の謂であり、“event”は実在物どうしを結ぶものの謂である、と Butterick は *Process and Reality* を引用しつつ教える。Butterick, 357。詳しくは、Alfred North Whitehead, *Process and Reality: an essay in cosmology* (London: Cambridge U. P., 1929) 101, 111, 326, 412–414参照。
- 27) 「記号そのものをイメージアリーに取って替わらせる」こうしたテクニクは、モンドリアン、カンディンスキー、クレーのものであり、詩においては E. E. Cummings が用いたもので *ut pictura poesis* の実践である、とマリオ・プラツは言う。Mario Praz, *Mnemosyne: The Parallel Between Literature and the Visual Arts* (Princeton: Princeton U. P., 1970), 212–213参照。
- 28) この詩は後にカブレット形式の読みうる形に書き直され、Ⅲ. 176に収められる。

Migration in fact (which is probably
as constant in history as any one thing: migration

is the pursuit by animals, plants & men of a suitable
—and gods as well—& preferable

environment; and leads always to a new center. If I were pressed
I’d add the dipole of qhe Aesir-Vanirs, that

to the impetus (the raging there is added the
Animus: that the Mind or Will always

successfully opposes & invades the Previous, This
is the rose is the rose is the rose of the World

Monday night August 8th

- 29) この詩は Obadiah Bruen に関する事実を曲げている。英国からやって来た Bruen は、確かにグロスターに住みはしたが、1650年9月に彼はすべての家財を売り払って New London に移住した。Bruen が記録係をしたのは、New London でである。Butterick, 207–208.
- 30) Butterick, 134–135.
- 31) マクシマスとオルソンが癒着することによって「語り手」が割れ、テキストを不安定にする詩は、拙稿で引用したものに限っても「手紙 3」(Ⅰ. 9–10)「『手紙』を運ぶオルソン——Charles Olson, *The Maximus Poems* 試論——」(上)『椋山女学園大学研究論集』第21号

第1部, 1990年, pp. 49-51; 「手紙 9」(I. 41-44), 同書, pp. 55-57; 「ロバート・ダンカン宛の手紙」(II. 38) 本稿V章「始原」参照, がある。これらの詩の「語り手」は, オルソンがそのままマクシマスになっている。よりはなはだししいのは *Maximus, to Gloucester* (I. 106-108) 中の次のような箇所である。

(my Aunt Vandla
had a house on Laurel Avenue before
Babson had his Institute there and once,
when I was older, I swung by,
in a girl's father's Hupmobile
and lawd, how the house had been inflated
in my mem-o-ry (I. 106)

32) Butterick, 281-282および328.

33) Butterick, 328.

34) David Perkins は, Nasir Tusi の精神世界を入植者たちの精神世界同様, 神話を現実だと考える精神のあり方だと言う。David Perkins, *A History of Modern Poetry: Modernism and After* (Cambridge, Massachusetts: Harvard U. P., 1987), 502. Nasir Tusi について Butterick は, Henry Corbin, "Cyclical Time in Mazdaism and Ismailism" in *Man and Time: Papers from the Eranos Yearbooks* (New York: Pantheon Books, 1957) を参照せよと註している。Butterick, 328.

35) David Perkins は, 帰るべきところと考えられるものとして「エデン」, 「原初の新鮮さ」, 「愛」, 「17世紀のドッグタウン」, 「Nasir Tusi の精神世界」, 「天国」を挙げ, これらがパウンド的な "ideogram" を形成すると言う。David Perkins, 502-503.

36) Butterick, 304.

37) Dogtown について Butterick はこう註し,

An uncultivated section of Gloucester strewn with glacial deposits in the central part of Cape Ann; a deserted village, said to have its name from the dogs kept for protection by widows and elderly women who lived there during the latter part of the eighteenth century. It will become a focus of attention in the second volume of poems. (Butterick, 36)
the Commons については, こう註している。

Dogtown was at first a heavily wooded area with some pasturage where the early settlers shared rights for cutting wood and pasturing cattle and sheep. As such, it was known simply as The Commons or the Commons Settlement, and later, Dogtown Commons.

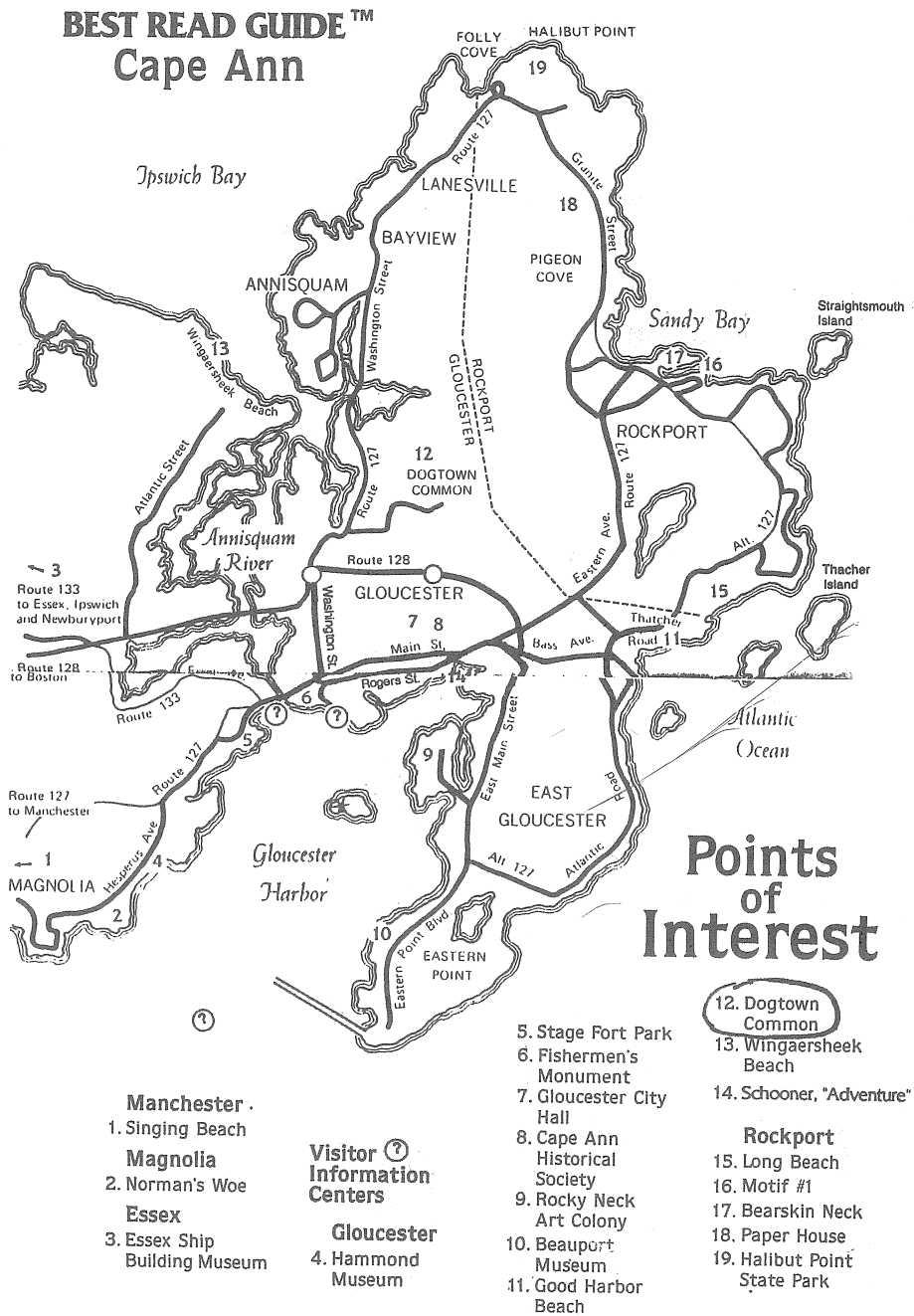
(Butterick, 329)

Dogtown Commons の位置については, 以下の図を見られたい。

38) David Perkins, 503参照。

39) Hallberg は, 「オルソンの最良の詩の一つ」と考える "The Librarian" を例にとって, こう問う。"Who is speaking? Olson, or Maximus?" そして, 語り手マクシマスと作者オルソンの区別が, オルソン自身にもできなくなったため, オルソンはこの詩を『マクシマス詩篇』から除外したという。Hallberg, 88-89. "The Librarian" は Robert Creeley ed., *Charles Olson: Selected Writings* (New York: New Directions, 1966) 217-219に収められている。Hallberg に上の問を寄せさせたその冒頭部は, 次のとおりである。

The landscape (the landscape!) again: Gloucester,
the shore one of me is (duplicates), and from which
(from offshore, I, Maximus) am removed, observe.



Best Road Guide: Cape Ann, 54-55

- 40) 『マクシマス詩篇』は2巻以降、グロスターのことを語るよりはむしろ作者オルソンのことを語るようになり、3巻では、オルソンが自らの作ったエレジーの世界の中心に坐す、とHallbergは言う。Hallberg, 169.

そして Hallberg は、次の詩を挙げる。

Now date August 1965 returning
 Gloucester from as far out in the world as my own
 wages draw me, and bitter
 police cars turn my corner, no one in the world
 close to me, alone in my home where a plantation
 had been a Sunday earlier than this been
 proposed, it is Osman (or Osmund) Dutch's
 name, and Gallop whom I am closest to,
 it turns out, once more drawn into the
 plague of my own unsatisfying possible identity as
 denominable Charles Olson... (Ⅲ. 80)

- 41) 拙論『『手紙』を運ぶオルソン——Charles Olson, *The Maximus Poems* 試論——」(上)『椋山女学園大学研究論集』第21号第1部, 1990年, pp. 53-54参照。
- 42) フェニキア伝説の Ousoos は狩猟の守護聖人であり, かつ最初の船大工でもあった。Ousoos が初めて樹皮を身体に巻いて海へ乗り出したのである。Butterick, 387参照。
- 43) Ⅲ. 30および Butterick, 50, 318参照。
- 44) Don Byrd は, 権力に抗するという点にスティーヴンズとオルソンの父との共通点をみる。Don Byrd, *Charles Olson's Maximus* (Urbana: University of Illinois Press, 1980), 175.
- 45) Charles Olson, *The Post Office: A Memoir of His Father* (San Francisco: Grey Fox Press, 1975), 23-35にこの間の事情が詳述されている。上司との不和を顕在化させたのは, オルソンの父が提出した休暇願いが受理されず, 無断休暇と見なされた一件であった。組合活動に熱心であったオルソンの父への意趣返しであった。以後, オルソンの父は減奉処分を受けただけでなく, 慣れた配達ルートから外され, 駆け出しの配達夫に振り当てられる条件の悪い勤務に就かされる。
- 46) Charles Olson, *The Post Office: A Memoir of His Father*, 25.
- 47) Charles Olson, *The Post Office: A Memoir of His Father*, 32-34.
- 48) Charles Olson, *The Post Office: A Memoir of His Father*, 28.
- 49) Hallberg は, 「戦略的撤退」をした人としてスティーヴンズを見, そうせずに没した人としてオルソンの父を見る。そして, 「戦略的撤退」をせぬ者は死ぬしかない, とここを解する。Hallberg, 16.
- 50) when/I was//a dog when Tyr/put his hand//in Fenris/mouth//—it was not a test,/it was to
end//that matter, Fenris/simply bit it//off Thereby/there awaits//a Reason: the Quest/is a
 Reason (Ⅲ. 34).
- 51) 拙論『『手紙』を運ぶオルソン——Charles Olson, *The Maximus Poems* 試論——」(上)『椋山女学園大学研究論集』第21号第1部, 1990年, pp. 39-42参照。
- 52) Butterick, 543-547参照。
- 53) & I go off
 a last time
 to leave this gate
 of my life
 & of the city
 since Ocean was its father and
 ours

chop now
suddenly
the warp of ocean's own
swell clangs
in the water before my eyes as dawn's here & the 1st sputtering

of the gulls tells
that *day is coming*

(Ⅲ. 159. イタリアックス筆者)

And as I go down
the boulevard toward
town another gill netter & behind me
now a quarter of a mile
the bridge sounds
rising like
a light thunder
to come with the
lightning previous which didn't
develop and day now will
claim the people and
be hot

(Ⅲ. 160 イタリアックス筆者)

- 54) 通常の意味での手紙とは無論異なるテキスト内の「手紙」——マクシマスがグロスターの民に向けて発信したはずの「手紙」——は、テキストの内部ですら、その発信→受信形態を維持できなかった。そして、「手紙」と名づけられているか否かに拘らず、テキスト内の詩の集積が「始原」構成へ向けての不能な「手紙」(letters) としてのみ機能する結果、「手紙」の発信人を「手紙」の運び手と書き手の二人に引き裂き、その中間にもう一人の主体を構成せざるを得なくするのが『マクシマス詩篇』の「手紙」なのだ。